讀本『南総里見八犬傳』

作者曲亭馬琴

里見八犬士

2009.12.01更新

江戸時代の読本(よみほん)。九十八巻百六冊。滝沢馬琴(たきざわばきん)作。文化十一年(一八一四)から天保十三年(一八四二)刊。

室町末期、安房(あわ)の結城(ゆうき)城で敗戦した里見義実(よしざね)の娘伏姫(ふせひめ)と、妖犬八房(やつふさ)と不思議な因縁で結ばれた八人の勇士が活躍する長編伝奇小説。八人は仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の徳をそれぞれそなえ、活躍して里見家を再興する。勧善懲悪を基調としている。略称『里見八犬伝』『八犬伝』。

[本文資料]

浩處(かゝるところ)に年の齢(よはひ)、八十(やそぢ)あまりの翁一人、眉には八字の霜をおき、腰には梓(あづさ)の弓を張り、鳩の杖に携(すが)りつゝ、途(みち)の眞中(まなか)に憇(いこ)ひてをり。故(もと)より潛行(しのびのたび)なれば、從者等(ともびとら)は先を得追(えおは)ず。そのとき翁は目を放さで、伏姫(ふせひめ)を熟々(つらつら)視(み)て、「これは里見の姫君ならずや。石窟(いはむろ)の歸さならば、翁が加持して進(まゐ)らせん」と呼びかけられて從者等(ともびとら)は、驚き劇(あは)てゝ見かへれば、現(げに)彼(か)の翁が爲體(ていたらく)、凡人(たゞびと)にはあらざりけり。愁(なまじひ)に實(じつ)を告ずは、惡(あ)しかりなん、と思ひしかば、老黨(ろうだう)老女は翁に對(むか)ひて、縡(こと)の趣(おもむき)些(すこ)しも隱さず、云云(しかじか)と告(つげ)にければ、翁しばしば點頭(うなづ)きて、「寔(まこと)に靈(りやう)の祟(たゝり)あり。これこの子の不幸なり。禳(はら)ふにかたきことはあらねど、禍福(くわふく)は糾(あざな)へる纏(なは)の如し。譬(たと)へば一個(ひとり)の子を失うて、後に夥(あまた)の翼(たすけ)を得ば、その禍(わざはひ)は禍ならず。損益の方(みち)みな然り。

歡(よろこ)ぶべからず、哀しむべからず。罷り歸(かへ)らばこの由(よし)を、義實(よしさね)夫婦に告(つげ)よかし。これ參(まゐ)らせん、護身(まもり)にせよ。思ひ合はすることあるべし」と誇貌(ほこりが)に説き示し、仁義(じんぎ)禮智(れいち)、忠信(ちうしん)孝悌(こうてい)の八字を彫(ゑ)りなしたる、水晶の珠數(ずゞ)一連(いちれん)を、懷(ふところ)より取り出して、閃(ひら)りと姫の衣領(えり)にかくれば、老黨(ろうだう)老女は劇(あわ)て惑ひて、諸共に額(ぬか)をつき、「靈(りやう)とは何の祟(たゝり)やらん。委細(つばら)に説(と)きて後々まで、禳(はら)ひ鎭(しづ)めて給ひね」と云へば翁はうち微笑(ほゝえ)み、「妖(よう)は徳に勝ことなし。假(よし)や惡靈(あくりやう)ありといふとも、里見の家はますます榮ん。盈(みつ)るときは必ず虧(か)く。又何をか禳(はら)ふべき。これを委細(つばら)に示すときは、天機を漏らすのおそれあり。伏姫といふ名によりて、みづから曉(さと)らば曉(さと)り得なん。

さはれ今日(けふ)よりこの女(め)の子が、嗄(な)くことは止(や)むべきぞ。疾(と)く疾く行きね。我れは早や、罷(まか)る也」と云ひかけて、洲崎(すさき)の方へ還(かへ)ると思へば、走ること飛ぶが如く、形(かたち)は見えずなりにけり。(第八回)

護身刀(まもりがたな)を引き抜て、腹へぐさと突き立てゝ、眞一文字(まいちもんじ)に掻(か)き切り給へば、怪しむべし瘡口(きずぐち)より、一朶(いちだ)の白氣(はくき)閃(ひらめ)き出て、襟に掛けさせ給ひたる、彼(か)の水晶の珠數(ずゞ)を包みて、虚空(なかそら)に昇(のぼ)ると見えし、珠數(ずゞ)は忽地(たちまち)弗(ふつ)と斷離(ちぎ)れて、その一百(いつびやく)は連ねしまゝに、地上へ戛(からり)と落ちとゞまり、空に遺(のこ)れる八つの珠(たま)は、粲然として光明(ひかり)を放ち、飛び遶(めぐ)り入り紊(みだ)れて、赫奕(かくやく)たる光影(ありさま)は、流るゝ星に異ならず。

主從(しゅうじゅう)は今更に、姫の自殺を禁(とゞ)めあへず、我れにもあらで蒼天(あをぞら)を、うち仰ぎつゝ目も黒白(あや)に、あれよあれよ、と見る程に、颯(さ)と音(おと)し來る山おろしの風のまにまに八つの靈光(ひかり)は、八方に散り失せて、跡は東の山の端(は)に、夕月(ゆふつき)のみぞさし昇る。

當(まさ)に是れ數年の後、八犬士出現して、遂に里見の家に集合(つど)ふ、萌芽(きざし)をこゝに開くなるべし。かくても姫は深痍(ふかで)に屈せず、飛去る靈光(ひかり)を目送(みおく)りて、「歡(よろこ)ばしや我が腹に、

物がましきはなかりけり。神の結びし腹帯も、疑ひも稍(やゝ)解(と)けたれば、心に懸かる雲もなし。浮世の月を見殘して、いそぐは西の天(そら)にこそ。導き給へ彌陀佛」と唱(とな)へもあへず、手も鞆(つか)も、鮮血(ちしほ)に塗(まみ)るゝ刃を抜き捨て、そがまゝ磯(はた)と伏し給ふ。こゝろ言葉も女子(をなご)には、似げなき迄に逞(たくま)しき、最期は特(こと)に哀れなり。(第十三回)

八犬伝の名(迷)ゼリフ

『八犬伝』の名ゼリフおよび迷ゼリフを抜粋してみた。もっとも迷ゼリフの方が圧倒的に多い(というより迷レトリック)。「本論」や「勘ぐりと細かいネタ」と重複してるものもある。

●蟇六「番作はわかきより、田畝の中に浮浪すれども、蛭子に劣る腰ぬけなれば・・・」(第十八回)――わははナイスレトリック。今度使ってみようかな。

●信乃「けふは南風(みなみ)が吹入れて、掻かざる垢もよれる日ぞかし」(第二十回)――信乃の衛生観念については「むさ苦しいぞ、信乃!」参照。

●荘助「今やうやくに目が覚ても、起甲斐なさに引被(ひきかつ)ぐ、衣のうら見の夏虱、猟竭(かりつく)したる虚の病の床は・・・」(第二十一回)――ようするに「やる気が出ないよー」と訴えてるわけだが、もうちょっとマシな表現というものが・・・(「荘助は足が短い?」参照)。

●荘助「心に物のあるにあらねど、朝の炊もさせ給はず、墨つきわろき鍋の尻、用なく居て置れし故に」(第二十一回)――上に同じ。

●左母二郎「渠(かれ)(注:浜路)が節操を竭すもの、信乃なるべきか、われなるべきか。定かに聞わきがたけれども、大かたはわれなるべし」(第二十七回)――『八犬伝綺想』でもツッコまれていた迷ゼリフ。この男は何を根拠に(笑)。

●房八「和主(注:小文吾)と己等(おら)は鰯鍋、内証の事には蓋をして、移香立ぬ術もあらん」(第三十四回)――実は「おら」にも驚いたんだが(笑)、「鰯鍋」とは何のことやら。〈同じ釜の飯〉みたいな感じか。

●房八「男態は大きうても、葉つきの橙、鉄甜瓜、見かけばかりで味ひなし」(第三十四回)――→同様小文吾に悪態をつくシーンだが、ここだけ書くと、食べ物の話のようだな(笑)。

●鹹四郎他「緊要の時は山林に、手も足も出ぬ薬鑵(やかん)の湯煮章魚(ゆでだこ)、真赤になりても恥知らず」(第三十五回)――さすがに侠客は悪態上手。小文吾言われ放題。

●房八「そこらに隠せし喪家の犬塚、外より洩ては物もなし」(第三十六回)――八犬士全員のバリエーション可能。

●丶大「二十年あまり埋木の花さかぬ身の苔衣」(第三十七回)――自身を評した言葉。そこまで卑下しなくても・・・。

●舵九郎「鉛刀(なまくら)武士奴(注:蜑崎十一郎)、おぼえてゐよ。偶怪我の功名で、汝が拳法(やわら)の捷(すぐれ)しならず。わがよく投られたればこそ、これ見よ膝も揚剥(すりむか)ね」(第四十回)――さらにこのあと「これでも啖(くら)へ」と尻を向けてたたいてみせる。ナイス負け惜しみ。

●畑上語路五郎「(小文吾に)被たる索(なは)の嚼(くひ)入るまでに、縛めたれば、既にはや、芋虫にだも劣りたり」(第五十三回)――船虫には勝ったけど(ベタネタ)。

●馬加常武「尺蠖(さくとりむし)の伸んとするとき、且(まず)その身を縮むといへば、窮達時あり、運によるべし」(第五十六回)――望郷の小文吾に。これで励ましてるつもりか?

●小文吾「今図らずも彼少女(注:旦開野)の、資(たすけ)によりてこの処(ところ)を、脱れ出る事を得ば、海月(くらげ)の骨にあふにもましたる、得がたき幸ひ」(第五十七回)――うはは変なレトリック!と思ったら辞書にも載ってる慣用表現だった(無知)。いわく「水母の骨一あるはずのない物、またはきわめて珍しい物のたとえ」、だそうだ。

●信乃「物の因縁あること、蓮根(はちす)の糸を引く如く、听れども尽ぬ者になん」(第七十二回)――納豆じゃなくてよかった。
●妙椿「(玉を手放した親兵衛は)水母(くらげ)の小蝦(えび)に離れし如く、要なき人にならんのみ」(百十一回)――やはりこれも慣用表現らしい。『夢想兵衛胡蝶物語』他にも似たような文章あり。好きなんでしょうか、水母。
●似児介「郷武撃れて俺們(われら)まで、痛痍(いたで)を負ふたる珍事中庸、論語に絶たる大変に」(第八十一回)――それは大変(笑)。ちなみに『中庸』『論語』とも「四書」の一つ。
●大角(賊に荷物を奪われ、着物の袖を引きちぎられて)「袖は惜むに足るものならねど、行裏(たびつゝみ)には金もありしを、(中略)喪ひしは、噫(あな)俺(われ)ながら遅鈍(おぞ)かりき」(第八十二回)――赤岩・犬村両父母の位牌が入ってるんじゃ?(第八十四回に包みを取り戻したあと位牌に手を合わせて泣くシーンがある)。ちょうど輯の切れ目だからなあ。
●道節「若們(なんぢら)牛糞馬涎の小人、玉か、石かも別ことなく」(第八十四回)――あんまりだ(笑)
●道節(氷垣夏行と落鮎有種にむかって)「頑愚の老人無智の壮佼(わかもの)、さこそは胆の潰れけめ」(第八十五回)――えらそう。
●信乃・道節「同国(注・武蔵国)＝(煉)馬平左衛門倍盛主の残党に、然(さ)るものありと知られたる、犬山道節忠与なり」(第八十五回)――おたずね者なのに堂々残党宣言。いいのか?
●丶大(賊にだまされた村人たちに)「田舎児は愚直なり。那(かの)奸賊に魅(まよは)されて、年来を歴(へ)しうへなれば(中略)還(かへつ)て洒家(われ)を疑はゞ、信用るものなかるべし」(第八十七回)――当人たちにむかって、ストレートすぎるんじゃ・・・。
●丶大「非如(よしや)兇賊なりとても、出家の手づから命を断ば、五戒を破る怕(おそ)れあり。この故に＝戸(かりびと)を、央(やと)ふてこれを撃したり」(第八十七回)――これでいいのか!?「血の気の多い丶大法師」参照。
●丶大「その身には相応しからぬ、最(いと)広大なる洞を造りて、栖たる故に妖賊の、奪て這里(ここ)に憑(よ)ることあり、是若們(なんぢら)が罪ならずや。今より他所に移るべし。洒家(われ)這(この)洞を伐崩(きりくず)さして、後の患を除んず」(第八十七回)――ひどい(笑)
●老猯(みたぬき)「目今(たゞま)埋させ給はずとも、是よりの後百二三十年、星霜を歴(ふ)るに及ば、人畜総て泰平の、聖化に遇る歓びあらん」(第八十七回)――上記丶大発言への返答。前半(引用しなかったが)は洞は天然のものを利用しただけだという釈明、後半は徳川幕府のヨイショ。抜けめないですね(笑)。
●毛野(蟹目上の逃げた小ザルと、つかまえようとあせる人々を見て笑ったあと)「方僅(いま)憶(おもは)ずも笑ひしは、是刀祢們(とのばら)を狭(さみ)せしならず。畜生なりとも那(あの)＝猴(さる)が、＝猴智慧もなく、技もなく、気をのみ悶て死を俟が、いとをかしくて堪ざりし」(第八十八回)――死にかけたサルをあざ笑う。毛野・・・結構ひどいかもしれない。
●「委(よど)まぬ水の犬川と、舌もて畊(たがや)す犬田の弁論」(第九十二回)――すみません、台詞じゃなくて地の文だけど、何かすごく笑えたので。
●五十子近隣の村人たち「明日より君(注・信乃)が生祠(いきみたま)を、村毎(ごと)に建、戸々(いへごと)に祭りて、御恩を子孫に伝へまつらん、噫(あな)たふと、＝(あな)めでた。」(第九十四回)――何かすごいことになっている。本当に祀られちゃったんだろうか(笑)。
●信乃「犬山の剛毅にして、決断に速(すみやか)なる、犬川の行婦塚(たびめづか)、犬飼の芳流閣、その才その武、多く得がたし」(第九十五回)――このあとさらに小文吾の「行徳の角觝(すまひ)、石浜の窮阨」、大角の「謹慎老実」をもほめる。なんで荘助だけ子供時代のことなんだ。他に大したことしてないみたいじゃないかあ。
●犬士たち(夏行が病のために結城の法要に行けなくなった際に)「夏行を、倶したる路にて像(かた)のごとく、中風暴(にわか)に発(おこ)りなば、倶(とも)に難義の旅宿を累(かさ)ねて、法会に後るゝこともあらんを、そ

の折ならぬは切(せめ)てもの、幸ひなり」(第九十六回)――モノローグだが、まず夏行を心配しないあたり、結構ひどい。これが人情だとは思うが、わざわざ書いちゃうあたり馬琴もイジワルである。
●義実(捕われの義通を救う方法を聞かれて)「我も亦、機に臨ねば、思ひ得たりし事はなけれど、家に豕なし、二十たび見ば、神の教に称(かな)ひやせん。是より外に術はあらじ」(第百三回)――照文による伝聞だが、孫の命がかかってる時に、言葉遊びをしてる場合なのか！？答えは「寛」。
●荘助(額蔵から改名するにあたって)「額(ひたひ)は顕すものなるに、額蔵と熟すれば、額蔵(ひたひかく)るゝと訓(よむ)をもて、世を潜(しの)ぶ貌あり。又死人の幎面(ふくめん)に似たり」(第四十四回)――そこまで卑下しなくても(笑)。最後まで額蔵のままだった『新八犬伝』がうかばれない。
●親兵衛(犬江なら狗竇(いぬくゞり)から入るのがふさわしい、と言われて)「我家号(みやうじ)を犬江と告(の)るとて、狗竇より入るものならば、若們(なんぢら)が主と憑(たの)む、蟇田は溷(どぶ)より出入するや」(第百七回)――うん、かっこいい！これは名ゼリフの方。
●道節「母のみにして簑虫(みのむし)の、父と呼れぬ彼等(注・力二郎・尺八)が愁歎」(第五十回)――何だろうこれは。母「のみ」と「簑」をかけたってことか？←5／6追記ー田村加那さまより「これは蓑虫の鳴き声を使った掛詞ではないかと思います。蓑虫は鬼の子なので恐れられて捨てられ、親を慕って「ちちよ、ちちよ」と鳴くという話が枕草子に載っています。」とのご指摘を頂きました(【四三】「虫は」に該当部分があります)。ありがとうございます！
●義実「見よ、此は是小月像(注・刀の名)なり、夜行(よみち)に迷ぬ奇特あり。」(第百六回)――夜道で光るとか？センサー付ペンライトみたいな感じ？
●義成(素藤から救出された義通に)「世に貴介の公子たるものは、(中略)身には美服を襲ね、口には美食を毎として、起＝(たちはたら)くこともなく、安坐のみして人を使へば、人に使るゝ苦辛を悟らず。この故に、多くは脚気の、病痾(やまひ)を生じて、救ひがたきに至るものあり。(中略)這(この)教訓を小耳に留めて、幾々(いついつ)までも、親兵衛が、忠義の大功をな忘れそ」(第百八回)――セリフ自体は立派なのだが、この一ヶ月弱の後(百十一回)、彼は突然病を発する。病名は脚気(笑)。おーい、そりゃないだろ。
●妙椿「かの折におん身們を、助けも得せず、救ざりしを、うらむは比丘尼に睾丸の、なしとて不足にせらるゝと、又何ぞ異なるべき」(第百九回)――これは思うに睾丸→狸という伏線なのでは。
●妙椿「おん身(注・素藤)の熟睡したる折、舟を這(この)山に遠からぬ、浦辺にはやく漕戻して、(中略)そが儘(まゝ)臥させ置たりしは、＝(わが)精妙の手段あるを、おん身に知せん与(ため)なりき。」(第百九回)――さっき素藤がいるのを見て驚いてたくせに(笑)。
●親兵衛(伏姫に去られたとき)「登(その)時小可(やつがれ)、哀慕に得堪ず、母に別るゝ心地して、外視(ひとめ)思はで蹉＝(あしずり)しつつ、うち泣てのみ候ひしを」(第百四回)――あの親兵衛でも我を忘れて大泣きしたりするのかと、ちょっと親近感。
●親兵衛(九百八十余歳で子供を産んだ政木狐に)「縦(たとひ)その身は異類なりとも、物老ぬれば経紅(けいこう)竭(つき)て、有身(みごも)ることは有かたからんに、然もなかりしは、こゝろ得かたし」(第百十六回)――ストレートすぎだよ、少年。
●丶大「八行具足の諸犬士の、姓を改め氏を更め、金碗氏を冒させんは、隋玉をもて糞土に埋め、蜀錦をもて敗衣(つゞれ)の裏に、做(な)すにひとしくや候はむ。」(第百三十二回)――そこまで卑下するかな(笑)。
●四九二郎「恁(かう)いふ我は緝捕(とりて)の頭人(中略)然る兵(もの)ありと知られたる、設良四九二郎綾丑(したらしくじらうあやうし)是なり。」(第百三十三回)――こんな名前を得意気に言われても。しかも偽名。もっとましな名前つけろよ。
●足利義政「二六(注・悪僧徳用の幼名・二六郎のこと)は十五未満の者なり」(第百三十七回)――二×六＝十二は十五未満。
●うるはしのちご「神祇の勧懲、仏陀の慈悲なる、天機を分教しぬるとも、若們(なんぢら)は是土中の骸骨、閻

王庁下の餓鬼なれば、今さらに亦、何をか知るべき。」(第百四十二回)――ここまで言う(笑)。
●親兵衛の供人たち「(親兵衛を助けに行きたいが)醋(す)にも塩にも、僅(わづか)に七名、那里(かしこ)にゆきても、大敵を、殺頽(きりくづ)すに力足らず。」(第百四十八回)――〈ン〉なレトリック。「酢にも蒟蒻にも」みたいなものか。
●小文吾「(犬江屋夫婦は)共に其本性、老実児(まめやかびと)で候へば、(中略)敵地の狗児(いぬ)に充(みて)候ひき。」(第百五十一回)――情報収集を頼んでおいて、イヌ呼ばわりはひどいんじゃ?あ、犬士にとってイヌは悪い意味じゃないのか。
●信乃(二度目の浜路くどきに際して)「幽冥のこと鬼神のう〈は、凡智に測り易からねども、男女夜深て相譚(かたら)はゞ、是瓜田の履、李下の冠、人の疑ひをいかゞはせん。」(第六十八回)――幽霊になってまで会いに来た恋人に言うことはこれかい(笑)。生前の浜路にも同じこと言ってるしなあ。
●舵九郎「阿乳母日傘で、饅頭の、皮を剥する栄耀の表盛(うはもり)」(第四十回)――らっきょうの皮もむいてほしい。
●道節(定正を追おうとするのを部下にたしなめられて)「しかれども和殿等の、意見も亦金玉なり。(中略)鄙語(ことわざ)に云、三歳になる子に、浅瀬を教らるゝとは、我上にこそありけれ」(第百七十七回)――えらそう。
●小文吾「(愛を打ち明けた旦開野に)死をだも厭はぬそなたの痴情、稍(やや)疑ひは解たれども」(第五十六回)――痴情とはあんまりな。
●角太郎「籬笆(かき)に自生の玉蜀(たうきび)も、懐狭き庭ながら、払子(ほっす)に似たる紫髯と、共に身の入る子もち達、端緒(はなを)緩びし駒下駄を、踏な覆(かへ)しそ、あぶなや。」(第六十二回)――雛衣に対するほとんど唯一の優しい言葉。「子もち」扱いは気になるが、とても好きな台詞だったりする。
●丶大「躬方(みかた)三所の闘戦に、一個も敵を殺さずして、他們(かれら)が同士撃したるのみ、恁(かく)てぞ拙僧本来の、志願に称(かな)ふを歓びぬるに」(第百二十八回)――自分たちの手さえ汚れなければ、死屍累々でもOK!と言ってるように聞こえるのは気のせいか。少なくとも喜ばなくたって・・・。
●背介(浜路と陣代の縁談について)「気の毒なるは犬塚ぬし。(中略)彼初物を他人の鰓(あぎと)、七十五日生延かねし、口果報のなき事よ」(第二十七回)――やらしいじいさんだな。後半は初物を食べると七十五日寿命が延びるという俗信から。
●浜路(左母二郎に)「噫(あな)無礼なる白徒(しれびと)かな。他夫(あだしをとこ)に伴るゝ、わらはなりせばいかにして、臥房を出てかぎろひの、命をこゝにやはすつべき。無益の事をいはんより、其処(そこ)退かずや」(第二十七回)――ボロクソ。
●姥雪与四郎「犬江の和子の、余慶を受し歓びは、ニ(とき)馬の尾に附たる蝿の、千里に到るに似たらんか」(第百六回)――腰が低いなあ。
●上水和四郎「狗児は素より暴鷙の、餌になりぬべき名詮自性、只一撃に結果(かたづけ)得させん。今年今月今日は、正に其身の命日なり、と自知して棒を喫ひね。」(第百六十三回)――おお名調子。しかしいかんせんマイナーなキャラなんだよなあ・・・。
●小文吾「今防禦使の大任もて、こゝちみづから手を下して、この勁敵(きゃうてき)に当りしは、士卒を多く撃せじ、と思ふ慈善に武勇を兼たる、賢者のニ(はたら)き皆実なれば、百の和四郎一度に向ふて勝まくすともいかにして、這(この)一犬に及ばんや。」(第百六十三回)――上のセリフに対する返答。自分でここまで言うかね。
●与四郎「又七個の犬士達の、愛顧によりてこの幸あり。驥尾(きび)の蒼蝿、虎前の野狐、兎毛ばかりも我徳ならぬを」(第百三十六回)――蝿にたとえるのが好きらしい。
●与四郎「(政元は)犬江腋子(わくこ)を抑措(とゞめおき)て、頑童(わかしゆ)にせまく欲する故に、弥勒の世まで手放ちて、安房へ返す日あるべからず。」(第百三十九回)――下司のかんぐり、と言いたいが当たってるからな(笑)。「弥勒の世まで」というのも壮大なスケール。

●親兵衛「人々見たるや、勝負は甚麼(いかに)。恁(かく)までに懲しし＝(けだらけ)和尚を、投殺さんか。悄(そ)と措(おか)んか、いかにぞや＝(いかにぞや)」(第百四十回)――猫灰だらけ。
●浦安牛助「若們は是鳧(あぢ)の群鳥、這圈套(かけわな)に入りたれば、炙禽(やきとり)にならんのみ」(第百七十四回)――名ゼリフかも。
●天津九三四郎「我も亦(中略)纔(わづか)に是戦飯司(ひやうらうつかさ)の、蛭児所行(こしぬけわざ)してありけるを」(百七十五回)――蛭児とかいて腰ぬけと読ませるのがツボ。
●道節「射て墜したる敵の大将を、救ふて活し置ならば、戦ざるにしくことなし。好々(よしよし)那奴が稲村に在る程は、非如(よしや)幾番(いくたび)召さるゝとも、我は得ゆかじ＝(得ゆかじ)」(第百七十九回中)――だだっ子じゃないんだから。地の文でも「発憤(むつかり)し」なんて書かれてるし。
●毛野「(道節は)是も亦勧懲に、係る所を思はずして、只相似たりとのみいはゞ、目屎(めくそ)の亡(うせ)ぬ人なるべし」(第百八十回上)――天下の暴言。
●義成(自分は子供だからと結婚の延期を願った親兵衛に)「明春の婚姻に、汝一人を漏しなば、汝の妻たらん者、必や怨むべし。娶りて後十七歳まで、閨房(ふしど)を倶にしぬるとも、又倶にせざるとも、其は我知る所にあらず。」(第百八十回下)――余計な世話だってんだ。
●道節「家に伝へし秘書によりて、火遁の術を獲たりしは、甚しき愆(あやまち)なりき。件の術は左道にして、勇士の行ふべきものならず。」(第五十回)――犬山家の先祖は勇士じゃないんだろうか。
●角太郎「縦(たとひ)雛衣わが底意を、知らで死んと欲するとも、瑞玉今なほ腹に在らば、水に入るとも溺るべからず、火に入るとも焼るべからず。」(第六十一回)――最終的に死ななきゃいいってものなのか。道節や親兵衛も一度は死んだし苦しいことは苦しいのでは。
●氷六「吁(あ)発明なる女中(注・船虫のこと)ぞかし。日比(ひごろ)よろづに烈しくて、五分でも透ぬ性ならずば、かくまで善にも強からじ。」(第六十二回)――ほめてるつもりなのか、これ？
●信乃「汝等人を識らずして、不良の心を起せしは、睡れる虎の髯を曳く、鼠に似たる白徒(しれもの)なり。」(第六十八回)――たとえがかっこいいような悪いような。
●小者出来介「客人よき事せられしな。ぬしの秘蔵の筥(はこ)入女児を、疵物にして勇悍(たけ＝(だけ))しく、いひ争ふとも誰かは聴ん。豆盗児には相応しき、連枷(からさを)代りにこれ喫(くらは)せん。」(第六十八回)――どことなくエロ親父っぽい言い回しが好き。
●木工作「(浜路姫を拾ったさいに)そが名をだにも知るよしなければ、軈(やが)て餌漏と名つけにき。こは鷲の餌に漏れて、わが子となれる義(よし)を取りたり。かくてその名を呼び誨(をしえ)ても、顔を背けて答せず。」(第六十八回)――愛情を疑いたくなるようなネーミング。いやきっと縁起のいい名前なんだろうけどそれにしてもなあ。もし返事をしてたら・・・。
●媼内「是さへ取れば死ふとも、生ふとも要はなし。寛哩(ゆるり)と御座れ。」(第七十三回)――主の泡雪奈四郎を斬って財布を奪うシーン。『忠臣蔵』の定九郎みたいでなんかかっこよい。
●次団太「大約(おおよそ)寅か申の日に、当る吉日を卜(えらみ)定めて、里人闘牛を興行す。(中略)這回(このたび)の大牛は、逃入村なる角連次、牛田村なる孟右衛門、虫亀村なる須本太郎、木沢村なる幹之助、蓬村なる艾三郎(もぐさぶろう)、塩谷村なる辛之助、小栗山村の判官八(後略)」(第七十三回)――個人的に蓬村の艾三郎と塩谷村の辛之助がヒット。
●荘助「(越後で冤罪によって処刑されかけたとき)武士は己を知るものゝ、為にこそ死ぬべけれ。俺們既に執事に知られて、その罪にあらざるよしを、いひ解れても聴れざりしは、便(すなはち)是天なり命なり。又何事をか争ふべき。死を俟(まつ)の外あらずかし。」(第七十八回)――小文吾もこれにあっさり同意。いくら何でもあきらめよすぎでは。『爆笑八犬伝』でもつっこまれてたが。
●毛野「親にはいまだ孝ならず、友にも信を疎にせば、犬士の屑といはれなん。」(第八十二回)――なんとなく微妙におもしろい言いまわし。

●義成「素藤は、初老の人なり。我女児浜路とは、二三十歳の長短あらん。恁(かゝ)れば年庚(としのほど)も相応しからず。」(百一回)――親兵衛と静峯姫はどうなんだ。
●音音「(酒の酌を命じられて)足駄の端緒に敗藁索(ふるわらなは)も、時の用には達にやあらん、相応しからぬ聆娘(こしもと)役、梅が香ならぬ枯野の密房(はちのす)、非如(よしや)刺とも甲斐なしとて、不甘(まずく)な喫しめされそ。」(百七十二回)――音音って何げに艶っぽい。よく「吻々(ほほ)」と笑ってたり。

資料その2

『南総里見八犬伝』(全10冊)1990 岩波文庫
表紙：『南総里見八犬伝』(全10冊)©岩波文庫
滝沢馬琴(『馬琴翁像』谷文二筆)
『現代語訳　南総里見八犬伝』(上・下)
曲亭馬琴　作白井喬二　訳2004　河出書房新社
『南総里見八犬伝』(上・下)曲亭馬琴　作鈴木邑　訳
西沢正史　監修2004　勉誠出版
『南総里見八犬伝』(上・下)
『図説　日本の古典19　曲亭馬琴』1980　集英社
『江戸異端文学ノート』
『闇のユートピア』松田修　著1982　白水社
『江戸読本の研究』高木元　著1995　ぺりかん社馬琴自筆のラフスケッチ
『馬琴草双紙集』高田衛　原道生　責任編集板坂則子　校訂1994　図書刊行会
読本『南総里見八犬伝』第三輯
表紙・裏表紙
『近世説美少年録』(全3巻)曲亭馬琴　作徳田武　校注1999　小学館
『八犬伝の世界』高田衛　著1980　中央公論新社
『滝沢馬琴』麻生磯次　著1959　吉川弘文館
月岡芳年『芳流閣両雄動』
歌川国芳『丸塚山』
『八犬伝綺想』小谷野敦　著1990　福武書店
『里見八犬伝』川村二郎　著1984　岩波書店
『為永春水の里見八犬伝後日譚』鶴岡節雄　校注1984　千秋社
『江戸異端文学ノート』松田修　著1993　青土社

●原作(校訂本)
■「南総里見八犬伝」岩波文庫(曲亭馬琴 作・小池藤五郎 校訂)
全十巻。(内訳は「岩波文庫と原典の対応」参照)
ちなみに源氏物語は全六巻である。六巻でもかなり長いが、南総里見八犬伝はそれよりも更に長い。古典文学最長篇だけのことはある。
そんな長さに圧倒されるし漢字も多い。しかしほとんどの漢字に振り仮名がある。つまり、表意文字で意味が分かり振り仮名で読みが分かる。慣れれば非常に読みやすい古典なのだ。しかも文庫という手頃な形態でわりと安上がりに読めるのがありがたい。
この新版では旧版とちがい、南総里見八犬伝では非常に重要な「挿絵」も、初版当時のままにすべて掲載して

いる。(「口絵挿絵索引」参照)亭外参照(別窓)→ 岩波文庫
新版第一版は 1990年。その後、20世紀末は品切れが続いていたが、2001年夏に重版された。

■「南總里見八犬傳」岩波文庫(旧版)(曲亭馬琴 作・小池藤五郎 校訂)
旧字表記なので馬琴の文字使いが分かる上に初版当時の雰囲気に浸れる。ただ「挿絵」が一部省略されている。今となっては入手は困難であろう。(「岩波文庫版・新旧比較」参照)
ちなみに、白龍亭の資料はこの旧版をベースとしている。新版しか読んだことのない人に馬琴本来の文字使いを伝えられると思う。とはいえ旧字・異体字の類は JIS定義外の文字が多い。白龍亭では人名に必要な漢字のみ GIF画像で再現している。(「＝文字の形」参照)

■「南総里見八犬伝」新潮社(曲亭馬琴 作・濱田啓介 校訂) 全12巻。
2003年 5月から配本を開始したハードカバーの原作本。判が大きいので文字も挿絵も大きいが、当然岩波文庫版より高価。新漢字なのがちょいと残念だが、総ルビをちゃんと欠けることなく入れてあるのは良い。
亭外参照(別窓)→ 新潮社

●現代語訳

■「南総里見八犬伝」宝島社(羽深 律 訳)
亭主の知る限り、唯一の「完全現代語訳」がこれ。ただし未だ完結していない。文語では「～なり」のところを「～であった」という風に表現するのだから必然的に原文より長い。南総里見八犬伝を一字一句理解しながら読む人向きか。完全現代語訳という企画は素晴らしいとは思いつつ、これを読む気力があるのなら原文を読むのも苦ではないような気もしてしまう。

■「日本古典文庫19・南総里見八犬伝」河出書房新社(白井喬二 訳) 新装版初版は 1988年。
この日本古典文庫というシリーズ、源氏物語は上中下三巻である。それより長い南総里見八犬伝を一巻にまとめたものがこれ。大胆な抄訳だが原作の雰囲気を色濃く残している。また抄訳でありながら犬江親兵衛の京都物語も削られてはいないし、八犬伝の全体がつかめる。
南総里見八犬伝の現代語訳本としては比較的バランスのいい作り。現代語訳本としては定番的存在。……とはいえ、文庫一冊本(下記二冊)ほどの手軽さはないかもしれない。

■「南総 里見八犬伝」中公文庫(平岩弓枝 文・佐多芳郎 画)
話題になった豪華本の文庫化。文庫版は 1995年。挿絵を眺めつつ八犬伝を軽く味わう、といった感じの本。内容は、八犬士が全員揃うところまで。それ以後の部分はあとがき風に軽く触れられている。挿絵を重視するなら豪華本版の方を選んだ方がいいかも。
途中「閑話休題」その一～その三という補注的ページを挿入して、原作にはあるがこの一冊では書ききれなかった部分について語っている。(余計なことながら……閑話休題という言葉の使い方が間違っている。おそらくは筆者ではなく編者がつけたのだろうが、閑話を休題したら本文に戻ることになる。ここは単なる閑話とすべき)

■「わたしの古典・安西篤子の南総里見八犬伝」集英社文庫(安西篤子 著) 1986年。文庫化は1996年。
女性作家による女性読者を対象とした古典の現代語訳シリーズである「わたしの古典」のひとつ。ということで、女性キャラクターを軸に、玉梓の巻、伏姫の巻、浜路の巻、沼藺・妙真・音音の巻、船虫の巻、妙椿の巻、姫君たちの巻という風に章立てしている。
偏見なのだが、女流というとキレの悪い文体ではないかと警戒してしまう。しかし、この作品は原作の持つキレ

の良さそのままに、面白いエッセンスだけをうまくまとめて、非常に読みやすいものになっている。原作の固有名詞を安易に省略したりせず、ルビを振って残してあるのも、好感が持てる。

巻末の「鑑賞」にはいささか異論があるが(「八犬伝は説教くさいか?」参照)、解説もそれなりに詳しいし、作品そのものもかなりおすすめである。白井喬二本より手軽で読みやすく、平岩弓枝本より原作の全体像が分かる詳細さがある。多くの人にとって(=男性読者にとっても)これがベストバランスであろう。現代語で手軽に読む八犬伝でどれか一冊、と問われれば、亭主ならこれを一押しにする。

●漫画

■「マンガ日本の古典10・南総里見八犬伝」河出書房新社(徳田 武 監修・宮添育男 画) 全三巻。初版は1991年。

マンガ日本の古典シリーズ(古事記、平家物語、太平記などがある)のひとつ。上中下の三冊によくぞこれだけ詰め込んだもんだ、というぐらい原作を詳細に漫画化している。字が多いので絵本に近いかも。南総里見八犬伝本来のストーリーがどんなものなのかを知るには一番手頃な本。

ただ数珠の絵と安房の地図が間違ってるのは残念。

もっとも地図を間違えた理由は分からなくもない。それは地名である。安西領である安房郡に「神余」という地名があり、神余領である平郡に「安西」という地名があるのだ。歴史的事実としては地名どおりであったようで、ちゃんと調べたがゆえにかえって間違えたものと思われる。

絵柄はよくあるビジネス漫画のそれに近い。強烈なキャラクターの魅力、というものは感じられないが、逆にいえばこの手の本では下手にキャラクターだけが目立ってしまっても困るかもしれない。

「八犬伝」を読む ― 文学史上の位置づけ

高木 元

みなさん、こんにちは。今日は「八犬伝」、精確には『南総里見八犬伝』と云いますが、このテキストをめぐる問題、とりわけ文学史における問題についてお話しいたしましょう。

『八犬伝』は、近世文学において最も格調の高かった読本(よみほん)と呼ばれる本格的な小説ジャンルを代表する長編史伝物の最高傑作です。我が国の小説史上の雄編で全九輯九十八巻百六冊にも乃びます。

作者は一般に「滝沢馬琴」と誤った呼びかたで伝えられていますが、馬琴という人は自らの著作物に署名する時に「滝沢」と云う本姓を使うことは決してありませんでした。ですから、作者としては原本にあるように「曲亭馬琴」という戯号で呼ぶべきです。ちなみに「曲亭」の「曲」は作曲の「曲」、「亭」は亭主の「亭」と書きます。

たとえば、式亭三馬のことを「菊池三馬」とは呼ばないし、十返舎一九のことを「重田一九」とは呼ばないのと同じことで、本姓プラス戯号である「滝沢馬琴」という呼び方は正しくないのです。おそらく、日記や手紙を膨大に書き残したこともあり、本名「滝沢興邦(おきくに)・解(とく)」という人物に注目が集まって伝記研究が先行したという事情と、明治期の作家達が「夏目漱石」と云うように本姓プラス戯号と云う使い方をした影響だと推測されます。

それにしても、いまだに教科書や副読本などに「滝沢馬琴」と記す不見識なものが存在しており、はなはだ困ったことだと思います。一見、些細な問題のようですが、特別に人称についてはうるさかった馬琴のことですから、草葉の陰から憤懣やるかたなくしていることと思います。

さて「八犬伝」は、その曲亭馬琴に拠って、文化十一(一八一四)年正月から天保十二(一八四一)年八月まで、ということは四十八歳から七十五歳に至るまでですが、その二十八年間の長きに渉って断続的に執筆されました。生涯の苦楽を尽くしたライフワークといってもいいでしょう。その道程では、板元が二度変わり、最愛の息子

「宗伯」に先立たれ、自らも失明してしまい、妻にも先立たれます。最後は、亡き宗伯の妻である「お路」の口述筆記によって、やっと完結に至ったという逸話は、どこかでお聞きになったことがあるでしょう。

おそらく、みなさん方の大部分が、この『八犬伝』というタイトルと里見家にゆかりを持つ「犬」を姓に持つ八人の犬士達が大活躍するという概略はご存知だと思われますが、実際に原文で読み通された方は、どれほどいらっしゃるでしょうか。テキストは、岩波文庫に全十冊で収められていますので比較的入手しやすいのですが、実際に手にされた方でも、全十冊を読破するには大変な時間と労力が必要ですので、前半の列伝部までで頓挫されてしまった方が多いのではないでしょうか。

かつて、馬琴が「読まれざる文豪」と呼ばれたことがあります。近年になって数少ないテキストではありますが『近世説美少年録』が小学館の「新編日本古典全集」三冊に収められ、『開巻驚奇侠客伝』が岩波書店の「新日本古典文学大系」に収められるなど、注釈付きの精確な本文が挿絵付きで出版されました。しかし、現在のところ「八犬伝」には注釈付きの完全なテキストはありません。「馬琴全集」の企画も聞きませんから、馬琴が「読まれていない」と云う状況は何一つ変わっていないのかもしれません。

その一方で、原本テキスト以外のメディアを通じて、「八犬伝」をご存知の方も多いではないでしょうか。年配の方であれば、犬士の列伝風に語られた講談本や、しばしば上演された歌舞伎、または東映映画『里見八犬伝』第一～三部（一九五九年）などを通じて、中年の方々の大部分は、石山透脚本一九七三～一九七五年にＮＨＫで放送された人形劇『新八犬伝』や、鎌田敏夫脚本の角川映画『里見八犬伝』でしょう。お若い方ですと、横内謙介による斬新な台本と市川猿之助演出主演のスーパー歌舞伎『八犬伝』（新橋演舞場、一九九三年初演）や、アニメの原作として出発したコミック版である碧也ぴんく『八犬伝』全十五巻（角川書店、一九八九～二〇〇二年）などが多いかもしれません。この他にも子ども向きから大人向きまで、実に数多くのダイジェストが出版されていますし、影響作というかアナザーストーリーとしてのテキストも数多く出されています。

ところが、この現象はとくに近現代に始まったことではありませんでした。既に、江戸時代においても、全ページ絵入りで平仮名ばかりで書かれた『仮名読八犬伝（かなよみはっけんでん）』（三十一編、二代為永春水・曲亭琴童〈お路（みち）〉・仮名垣魯文、嘉永元～明治元）や、『雪梅芳譚犬の草紙（せつばいほうだんいぬのそうし）』（六十編、笠亭仙果抄録、嘉永元～明十五）をはじめとする「草双紙」と呼ばれるメディアや、歌舞伎狂言に脚色された上演や、浄瑠璃本『花魁荅八総（はなのあにつぼみのやつぶさ）』、常磐津正本『八犬義士誉勇猛（ほまれのいさおし）』や、俳書『狗児草』や狂歌本などがあり、さらに錦絵と呼ばれた浮世絵で、二代目国貞画「大錦絵・八犬伝犬廼草紙」全五十枚シリーズや、芳流閣などの名場面集があり、そのうえ、「八犬伝双六」なども出されていました。他にも、鈍亭魯文による切附本『英名八犬士』八編など数多くのダイジェストや、為永春水に手になる『貞操婦女八賢誌（ていそうおんなはっけんし）』などの作り替えものや、艶本化された『恋のやつふぢ』に至るまで、数多く出板されていました。そして、多くの人々がそれら原本以外のメディアを通じて「八犬伝」を享受してきました。ですから、単に「八犬伝」と云っても実に様々なバリエーションが存在し、それらを通じて現在に到るまで多くの人々に享受され続けてきたわけです。

文学史を問題にする時には、このような享受の諸相に想いを馳せる必要があると思います。

なお、八犬伝関連の資料の蒐集で有名なのが千葉県の館山市立博物館です。原本は勿論のこと、様々な関連資料の所蔵量では今のところ日本一ではないでしょうか。多数の資料が定期的に入れ替えられて常設展示されていますので、機会があれば足をお運びになると良いと思います。

ここで、少し原本に関するお話をしたいと思います。

江戸時代は出板が盛んになった時代として知られていますが、それは印刷技術の進歩だけではなく、商業の発達に見合った形で流通機構が整備された結果です。江戸時代の最初には、もっぱら寺などが自家用として本を印刷し供給していました。その後、不特定多数に向けて流通させることが可能になったため、書物に商品としての価値が生まれ、出板と云う業体が発展したのです。もちろん、リテラシィの向上に拠る読者層の拡大という要因も無視できないと思います。

江戸時代も後半になると、江戸の地に於いて「地本」と呼ばれた「草双紙」や「錦絵」など安価な本は地本問屋の管轄となり、大量に出板販売されることになります。一方、以前から上方を中心に流通していた書物問屋の管轄する「物の本」には高価な書物が多く、貸本屋が流通の媒介を担ってきました。このような状況の中で、十九世紀に入ると、江戸の貸本屋が江戸読本という新たなジャンルのプロデュースを始めます。貸本屋は現在のアンテナショップのように、流通の最先端を敏感に知ることが出来る位置にありましたから、新たに流行性の商品としての「江戸読本」を企画プロデュースすることが容易にできたのです。

例えば、鶴屋喜右衛門という板元が、当時の流行人気作家であった山東京伝と、新進気鋭の作家であった曲亭馬琴との読本を、まるで競わせるように相次いで出板し、江戸読本の流行を演出したことが分かっています。その際、特徴的なことは、従来、縹色(はなだいろ)無地に、題名を記した短冊形の紙を貼っただけの地味な体裁であった本に美しい意匠が凝らされ、色とりどりの装飾が加えられたということです。読者に対する本の「自己主張」と云っても差し支えないでしょう。これは、一人でも多くの人に、手に取って読んで貰いたいと云う、文字通り「商品」としての本ゆえに必要なデコレーションだったのです。「八犬伝」も輯毎に犬をあしらった意匠の美しい表紙が備わっています。

余談ですが、今回のお話では画像資料が一切使えなかったのが残念です。具体的なモノについての話の場合は、視覚資料が大変な有効性を持つからです。以下、お話しする内容も言葉だけではうまく伝わらないかも知れませんが御容赦下さい。

さて、本の出板に関する先行投資やプロデュースは、板元である貸本屋側の才覚で進められたのですが、実際の現場で本を作り上げたのは「作者」でした。その作業は、本文の記述だけではなく、挿絵の下絵、見返や目次のデザイン、板元の広告文にいたるまで、本の隅々まで、全て「作者」の指示で作られていったのです。このことは、現存している「稿本」と呼ばれる「自筆原稿」と、実際に出板された「板本」とを比較すれば、一目瞭然です。特に、馬琴の場合は細かくて、口絵の下書きに「老人ひとがらよく」などという画工に対する指示を、こまめに朱筆で加えています。

ところで、『八犬伝』のように板木によって摺られた本のことを「板本」と呼んでいます。この板本が出板されるまでの手順を簡潔に紹介しておきます。作者の書いた原稿すなわち「稿本」は、仲間行事の検閲を経てから、「筆耕」と呼ばれる職人の手で清書されて板下となります。一方、「画稿」と呼ばれる下絵は浮世絵師が担当する画工に渡され、挿絵の板下が描かれます。この板下を桜の木で作られた「板木」に裏返して貼り付け、彫刻職人である「彫り師」が彫るわけです。できあがった板木は、摺り師の手に渡って摺られます。ここで「校合」いま云うところの校正が何回か行われたようです。作者の訂正が朱筆で入れられた、現存している「校合本」を見る限り、間違えの訂正だけで、所謂「推敲」が行われた形跡はありません。間違えた部分を削り取って入木し、「象眼」を施して訂正をしたのです。これが終わると、正式に摺りの作業に入り、摺られた紙は半分に折られて、表紙を付けて、糸綴じ製本されて、「袋」に入れられて売り出されるわけです。なお、この「袋」とは、毎輯ごとに何冊か(普通は五冊)を帯状に、海苔巻きのように巻いたもので、紙袋のようになっているわけではありません。

このような按配ですから、出板とは云っても、いわば「家内制手工業」のような仕組みで生産されていたわけです。とりわけ、初摺りと呼ばれる最初のロットは板木も摩耗していなく、ことさら入念にこしらえられるため、手工芸美術品と云っても良い程に、それは美しいものでした。現在、この出板された当時の初摺本を彷彿とさせる程に刷りの状態も保存状態も良い本はめったにお目に掛かれませんが、八犬伝の場合は国立国会図書館に馬琴の手沢本が所蔵されており、この本は比較的ウブな状態を保ったものです。

以上の説明でお分かり頂けると思いますが、「本」と云うものは単に本文が読めれば良いと云うモノではないのです。とりわけ『八犬伝』は、表紙の意匠から始まって文字も絵も含めて、板木によって摺られた板面の全てが読むべきテキストとして存在しているのです。ですから可能な限り早い刷りの、それも保存の良い原本で読みたいものですが、現実的には大変に難しいことです。岩波文庫本の『八犬伝』は、残念なことに、表紙も見返も刊記や広告も図版が入ってません。最近出版された新潮社版『南総里見八犬伝』は、大きな活字で読みやすく刊記

や広告の翻刻も入っているのですが、残念ながら表紙の意匠が分かるカラー写真図版は入れられていません。

この様に良い本にこだわるのは、単にマニアックな欲望からだけではありません。著作権の無い時代ですから、初板初摺本にしか作者の意図が直接反映しなかったと考えられるからなのです。また、当時の板元の賢しらで、後摺になってから摺り手間を省いて薄墨や艶墨板の使用が止められたり、場合によっては、分冊されたり、改題されたり、挿絵そのものが省かれてしまっている例すら見受けるのです。『八犬伝』の場合も、七輯巻五に折込まれていた「闘牛図」は早い段階で省かれていますし、七輯巻四の挿絵中に薄墨で入れられた浜路の亡霊は後摺本では埋木してつぶされています。したがって、初板初摺の状態の確認は、正しい読解のために是非とも必要な手続きであるといえましょう。

ただ、その一方で、享受の問題を考えた場合、初板初摺本を手にして読んだ読者は非常に限られていたものと思われます。現在に至るまでで、一番ポピュラーで多くの読者が読んだテキストは、間違いなく新旧の岩波文庫版テキストだといえるからです。さらには先程お話しした通り、原本以外の「読者」は更に多いと予想されます。つまり、テキストの問題としては、最初の板本についてのみならず、後摺本や原本以外にも広い視野が必要であるということになります。

この辺で八犬伝の内容に話題を移しましょう。

八犬士の名前は『合類大節用集』という辞書の「巻十・数量門」に、「里見八犬士」として「犬山道節・犬塚信濃・犬田豊後・犬坂上野・犬飼源八・犬川荘助・犬江親兵衛」の名が挙げられています。しかし、八犬士の行跡については伝えるところがなかったので、里見氏の事跡を伝える『房総志料』や『里見軍記』などに拠って時代背景を考証して、その世界に野史として『八犬伝』を虚構したのです。

物語の発端部は、所謂「伏姫物語」と呼ばれて、肇輯巻一第一回から二輯巻二第十四回まで、独立した物語を形作っています。簡単に要約してみましょう。

安房国の滝田城では、山下定包が主君・神余(じんよ)光弘を奇計をもって討って主家横領を謀り、主君の愛妾玉梓を妻として富貴歓楽をきわめていました。その定包を狙う忠臣金碗八郎は、嘉吉の乱に破れて安房の国に落ち延びた、里見義実に出会い、定包を滅ぼします。義実はひとたびは玉梓を許そうとしたのですが、金碗八郎の諫めで断罪します。しかし、玉梓は深く怨んで、里見と金碗に長く祟ることを口走って死にます。

その後、金碗八郎は故主神余(じんよ)対する義によって切腹しますが、一子金碗大輔を、義実が面倒見ることを約束します。義実はやがて妻を娶って一女伏姫と一男義成をもうけますが、伏姫は三歳になってもものが云えません。ある日、役行者の化身と思しき翁が姫を相し、仁義礼智忠信孝悌の八字を彫った水晶の数珠をお守りとして与えます。そののち、姫は美しく健やかに成長します。

そのころ近村の百姓の子犬が牝狸に育てられるという噂がありました。義実はその犬を召して八房と名付け、伏姫の愛玩犬とします。しばらく後、凶作で疲弊していた滝田城は、隣国の安西景連に攻め込まれ、落城寸前でした。義実は愛犬八房に向かって「敵将景連の首を持ってきたら娘をやる」と戯言(たわむれごと)を云います。ところが、八房は本当に景連の首を銜えて戻ってきてしまいます。動揺した敵陣に逆襲に出た義実は、大勝利をおさめ、結局、安房国四郡を統治下におさめて仁政をひきます。

その日以来、八房は只管伏姫を求めるようになります。怒った義実が八房を殺そうとすると、娘伏姫は「主君たる者は信義を果たさなければならない」と諫め、父の言葉を成就するために、冨山(とやま)へと、八房に伴われて行きます。数珠の文字は、何時しか「如是畜生発菩提心」と変わっていました。山中では、読経三昧の日々を送るのですが、妖犬八房の「物類相感」による気を受け、懐胎してしまいます。偶然訪ねてきた父と金碗大輔の前で、その身の潔白を証すために、自らの腹を裂きます。すると白気が立ちのぼり、「仁義礼智忠信孝悌」という文字に戻った八つの玉が飛散します。大輔はその場で剃髪し「丶大」の名乗って、飛び散った玉の行方を尋ねる旅に出るのでした。

この玉が飛び散るという趣向は、有名な中国白話小説『水滸伝』発端部に拠るものです。しかし、ここで注意

したいのは、義実の二度に及ぶ《失言》が『八犬伝』物語の発端部を動かす大きな契機として書かれている点です。一度は「許す」と云ったにも関わらず結局は討つことを命じたという《失言》は、「人の命をもてあそんだ」と玉梓の怨念を発動してしまいます。その結果、八房に伏姫が伴われると云うことになるのです。しかし、そのことが無ければ八犬士が生まれる契機となる八つの玉が飛び出すことにも成らなかったわけで、馬琴は良く「禍福は糾ふ縄の如し」(『史記』南越伝)、「人間万事塞翁が馬」(『淮南子』人間訓)、「福の倚る所、禍の伏する所(倚伏)」(『老子』五十八章)、「盈つれば虧くる」(『史記』蔡沢伝)などという故事を用いて繞り行く因果を言い表しています。

そういえば、「名詮自性」と云うのも『八犬伝』の構想に深く関わる方法です。例えば「伏姫」の「伏」と云う字は人偏に犬と書きます。したがって、人間でありながら犬に従っていく運命だったと馬琴は説明するのです。同様に、「八房」と云う漢字を解体すると(ちょっと苦しいのですが)「一つの尸八方〈散る」と成るわけです。つまり、名が体を表すと云う単純な「名詮自性」は、『八犬伝』においては、アナグラム(文字の謎)として、緻密に構想化されているということができるでしょう。

発端部に登場する役行者には、大島から富士山に海上を渡って通って修行したと云う説話が『日本霊異記』などに見られます。となると「富山」は富士山を思い起こさせます。この発端部の典拠として『富士山の本地』を置いて見ようとする信多純一氏の所説があります。其処には獅子に乗る女仙も登場し、八房に騎乗する伏姫のイメージとの類似も指摘されています。さらにこのイメージは、後に女装している犬塚信乃が与四郎犬にまたがって馬術を修行すると云う趣向の挿絵にまで影響を与えているのです。

伏姫物語では結ばれることのなかった伏姫と丶大は、「義烈の一婦一夫は八士の父母」と本文にもありますが、孤児達の物語とも云うことの出来る八犬士列伝において、幻影としての父母となっていると見ることも出来るかも知れません。この玉を所有する八人の少年たちは、名字に「犬」の一字がつきます。すなわち犬塚信乃、犬川壮介、犬山道節、犬飼現八、犬田小文吾、犬村大角、犬坂毛野、犬江親兵衛で、いずれも体のどこかに牡丹形のあざを持っています。不思議な因縁を持つ、この犬士たちが邂逅離散を繰り返していく中途、古那屋の段などにおいて、丶大は八犬士と里見家との縁を知らせる役目を果たし、伏姫は伏姫神として犬士達を援護し、ついには安房国に集結して里見家に仕え、対管領戦の重鎮となり、完全な勝利をもたらすことになるのです。

さて、ここで少しだけ本文を声に出して読んでみることにします。富山の段と呼ばれている、八房に伴われた伏姫の冨山での生活の様子を述べた部分です。(【注】音の問題なので敢えて現代仮名遣いの平仮名で表記する。)

ぢょくせぼんなうしきよくかい、たれかこぢんのかたくをのがれん。ぎおんしょうじゃのかねのこえは、しょぎょうむじょうのひゞきあれども、あくまでいろをこのむものは、きぬぎぬのわかれをおしむがゆえに、たゞこれをしもあたとしにくめり。さらそうじゅのはなのいろは、じょうしゃひっすいのことわりをあらわせども、いたずらにかをめずるものは、ふうのすぎなんことをねたむがゆえに、ひとえにえんねんのはるをちぎれり。かんずればゆめのよ、かんぜざるもまたゆめのよに、いずれかまぼろしならざりける。おもいうちにあるものは、りうげのさんえにあうといえども、ぼんぶしゅつりのちょくろをしらず。さめてまたさとるものは、こけつりゅうたんにありといえども、ゆかじょうじゅのけらくおおかり。かくまでによを思ひすてて、とやまのおくにふたとせの、はるとしあきをおくるかな。

さてもさとみぢぶのたいふよしさねのおんむすめふせひめは、おやのため、またくにのために、ことのまことをたみくさに、うしなわせじとみをすてて、やつふさのいぬにともなわれ、やまじをさしていりひなす、かくれしのちはひととわず。きしのはにゅうとやまかはの、さやまのほらにますげしき、ふしどさだめつふゆごもり、はるさりくればあさとりの、ともよぶころはやえかすみ、たかねのはなを見つゝおもう、やよいはさとのひなあそび、うないおとめがみかもなす、ふたりならびいけさぞつむ、なもなつかしきはゝこぐさ。たがうちそめしみかのひの、もちいにあらぬひしかたの、しりかけいしもはだふれて、やゝあたゝかきこけごろも、ぬぎかえねども、なつのよの、たもとすゞしきまつかぜに、くしけずらしてゆうだちの、あめにあらうてほすかみの、おどろがもとになくむしの、

あきとしなればいろいろに、たにのもみぢばおりはえし、にしきのとこもかりそめの、やどとしらでやしかぞなく、みさわのしぐれはれまなき、はてはそこともしらゆきに、いわがねまくらかどとれて、まきもまさきもはなぞさく、しじのながめはありながら、わびしくおればししじもの、ひざおりしきてとにたゝず、のちのよのためとばかりに、きょうもんどくじゅしょしゃのこう、ひかずつもればうき事も、うきになれつゝうしとせず、うきよの事はきゝしらぬ、とりのねけもののこえさへに、いちねんけくのともとなる、こゝろばえこそしゅしょうなれ。

第十二回　冨山の洞に畜生菩提心を發す　流水に泝て神童未来果を説く

前田愛は「近代読者の成立」(『前田愛著作集』二巻所収)において、この場面は「法華経読誦という音読を意識した文体である」と指摘している。しかし今、実際に耳からお聞きになった通りで、音読してしまうと音読する側も『八犬伝』の漢字文脈の本文がまったく分からない。これでは、八犬伝独特の漢語に和語を振仮名として振るという表記の二重性という豊かさが失われてしまいます。つまり、音読を意識した文体ではあるが、だからと云って皆が皆『八犬伝』を音読していたとはとても思えないのです。

さて、いま読んだ最初の部分に、有名な『平家物語』の冒頭がうまく取り込まれていましたが、何故ここに唐突に『平家物語』の冒頭が出てきたのでしょうか。播本眞一氏は、この冒頭に対応する末尾、此処には引かれていないわけですが、すなわち「灌頂巻」に描かれる「建礼門院が大原に隠棲して一門の後世菩提を弔う」という内容が、伏姫の境遇に引き継がれているのだと読まれています。曰く「『平家物語』が祇園精舎ではじまり女院死去で終わるように、『八犬伝』富山は、平家の冒頭によって語りだされ、伏姫の死で幕を閉じる」(播本眞一『南総里見八犬伝』第十二回を読む」、『近世文学の新展開』、二〇〇四年、ぺりかん社、所収)と。卓見だと思います。

ところで、このような所謂「美文調」である七五調の和漢混淆文体が『八犬伝』には時々出てきます。古語や雅語、掛詞や縁語など、修辞的文辞を目一杯駆使した調子の高い、そして無内容な文章でして、現代の小説ではまずお目に掛かることがなくなってしまいました。尤も、『太平記』などの語り物軍記の系譜を継承した文体であると云えるでしょう。『八犬伝』と『朝夷巡島記』との評判記である『犬夷評判記』でも「すべて万葉集の歌の言葉をもて綴りたる文辞のこなし、どうもいへぬ／／」と自評しています。つまり『万葉集』的世界を背景化した記述というわけです。ならば、播本真一氏が云うように「うないおとめ」から、伏姫・金碗大輔・八房の関係に、謡曲『求塚』の素材となった二男一女型の妻争い説話が透けて見えることになります(前出「『南総里見八犬伝』第十二回を読む」)。

このように、『八犬伝』に用いられている言葉は一見単なる修辞に見えても周到に選び取られたものであり、何処に出典があるのかは細かな注釈作業を積み重ねて見付けていく他に方法がありません。一読しただけでも一通りの文脈が取れてしまうために読み流してしまうことが多いのですが、留意すべき点だと思います。その意味では注釈付きのテキストが備えられると一段と面白く読めるようになると思うのですが‥‥。

考えれば考える程『八犬伝』と云うテキストは実に複線的です。壮大な構想に基づく本筋のみならず、所々に割り込んでくるノイズとしての考証があります。冒頭の三浦岬での義実による「龍の講釈」が象徴的ですが、江戸読本というジャンルが、考証の混入を許すものとして作り上げられてきたと云えるかも知れません。割注や頭注で示される部分もありますが、会話や地の文中を割いて延々と繰り広げられる蘊蓄も、実は『八犬伝』にとって大切な一要素だと思います。

世の中が忙しく安閑と長編大作を読んでいられない明治時代になり、原文の味わいを損なわずに通読できるという点が新機軸であった『校訂略本八犬傳』(逍遙序、鴎村抄、明治四十四年九月刊、丁未出版社)という原文を生かした縮約本があります。「八犬傳の校畧に就いて」という序文において、不要な形容語や古事の引用を省き、閑話、挿話、講釈を削り主人公のエピソードのうち面白い部分だけを採って、繋ぎの部分にも馬琴の使った本文の語句を用い、本筋を外れた余譚も省いて約六分の一に縮めたが「八犬傳の梗概を略述したる物語の類でも無く、また八犬傳の美文を抄略したるものでも無くて、原著者其人の筆法を以て縮圖せられたる小八犬

傳」であると述べています。しかし、序跋もなく、ノイズのない整序された本文を読んでみても、少しも『八犬伝』らしくないのです。

もう一つ大切なのは、『八犬伝』のテキストに〈馬琴自身の物語〉を埋め込んでいる点です。執筆上の苦労や問題について、実に饒舌に舞台裏を語っているかに見えます。その最たるものが「回外剰筆」と名付けられた最後の一冊です。そこでは、お路に口述筆記をさせるのが如何に大変であったかを大袈裟に書き記しています。どうもそれが「江戸時代の漢字を知らない女に偏旁を教えながらの続稿は如何に大変だったか」と云う逸話として一人歩きしてしまったようです。岩波文庫本で云えば十冊目の二十二ページ五行目あたりなのですが、九輯巻四十六第百七十七回半ばが、馬琴が筆記を断念したところで、其処からお路が書き継いだわけです。丁度この部分を含む自筆稿本が早稲田大学図書館に所蔵されており、多くの本や図録に図版として紹介されています。右半丁は筆もかすれ罫線からはみ出した目の見えない馬琴のにじり書きで、左の半丁はお路の整然とした文字が確かな筆運びで書かれています。何処から見ても「漢字を知らない女」の書いたものとは見えません。つまり『八犬伝』と云うテキストは、その執筆状況すらも物語化した文脈を孕んだテキストなのです。

一方、馬琴は本文テキスト以外でも自作の『八犬伝』に言及することが度々ありました。高松藩家老木村黙老、松阪の富商殿村篠齋・小津桂窓、江戸の旗本石川畳翠ら愛読者グループとの文通です。後には『評答集』としてまとめられています。これは、人々の批評に対して馬琴が答えていくという形式で、もっぱら馬琴が主導したものです。とりわけ「稗史七法則」と呼ばれた「主客・伏線・襯染(しんせん)・照応・反対・省筆・隠微」という法則が、中国小説に用いられていると云う主張を、天保六年八月二十二日に記した『南総里見八犬伝』「第九輯中帙附言」で公開し、これに関する応答が主になっていきました。しかし、この批評理論は馬琴にとっては同時に創作原理でもあったわけです。ただ、「隠微」だけは構想や趣向に関するものではなく、基本的には「勧善懲悪」という作者の姿勢を云ったものだと思われます。

この勧善懲悪ですが、馬琴の思想のように受け取るのは如何でしょうか。「主義」ではなく謂わば「制度(書式)」とでも云ったら良いのでしょうか。基本的に、万民向け普遍的倫理観(因果応報の理)に基づく書きぶりは、江戸読本を書くための前提であって、現代に至るまで、勧懲ではない大衆小説(ドラマ)はないのです。しかし、勧懲は啓蒙的で下等なものなのでしょうか？　例えば〈勧懲が正しくない現実社会〉を相対化する仕掛けという考え方も出来るかも知れません。

勧善懲悪については、江戸読本に於ける〈世界〉と〈趣向〉を軸に考えてみることが出来ます。この〈世界〉と〈趣向〉という用語は近世演劇で使われる術語なのですが、テキスト全体を覆う具体的な設定が〈世界〉で、例えば「忠臣蔵の世界」と云うように云います。これに対して〈趣向〉は、仕掛けに相当するもので「お家騒動の趣向」と云うように使います。言い換えれば、〈趣向〉とは、場面毎の挿話(エピソード)(俳諧の附合、芝居の場、黄表紙、説話的短編の前期讀本)で、〈世界〉は、構想(プロット)(筋、章回體小説、敵討物合巻、後期讀本)というふうに云えるかもしれません。つまり、「勧善懲悪を正す」と云う枠組みが要求されるのは、ある程度、筋の長さを備えた中長編ものなのです。そこで、江戸読本に要求された「制度」が勧善懲悪であるというふうに云ってみたのですが、いかがでしょうか。

勧善懲悪というレッテルが『八犬伝』を始めとする馬琴読本に貼られて久しいものになりますが、文学的価値の無さを示すがごとくに認識され続けてきたようです。これは、例の坪内逍遙の『小説神髄』(明治十八年)における「批判」に発端があると云われていますが、本当にそうでしょうか。

彼の曲亭(きよくてい)の傑作(けつさく)なりける八犬傳(はつけんでん)中(ちう)の八士(はつし)の如(ごと)きは仁義(じんぎ)八行(はつかう)の化物(ばけもの)にて決(けつ)して人間(にんげん)とはいひ難(がた)かり

勧懲(くわんちやう)を主眼(しゆがん)として八犬士傳(はつけんしでん)を評(ひやう)するときには東西(とうざい)古今(こゝん)に其類(そのるい)なき好(かう)稗史(はいし)なりといふべけれど他(た)の人情(にんじやう)を主脳(しゆなう)として此(この)物語(ものがたり)を論(あげつろ)ひなば瑕(きづ)なき玉(たま)とは稱(たゝ)へがたし

八犬傳(はつけんでん)をば小説(せうせつ)ならずといふにはあらねど今(いま)証例(しようれい)に便(べん)ならんが為(ため)にしばらく人口(じんこう)に膾炙(くわいしや)したる彼(かの)傑作(けつさく)を引用(いんよう)せしのみ

これを全面否定の文章とは云えないでしょう。勧懲小説としては評価しているわけで、つまり江戸読本の傑作であることは充分に認知していたわけです。また、ここで用いられている「人情」と云う用語も厳密には難しいのかも知れませんが、キャラクタと考えれば、八人それぞれキャラが立っていると云えなくもありません。

文学史の評価が、如何に逸話や不正確な理解に拠って形成され、そしてそれが、そのまま継承されて行くと云うことに対して、私たちは充分に警戒する必要があるのです。特に『八犬伝』についての評価は、毀誉褒貶が激しかったため、やはりご自分の目で確かめるのが一番だと思います。

最後に、『八犬伝』というテキストに、馬琴が仕掛けた「謎解き」の面白さについて触れておきたいと思います。以前、高田衛氏が『八犬伝の世界』(中公文庫)において明らかにした、八字文殊曼荼羅を典拠としたと云う説は、八犬士の二人が何故「女」として登場したかと云う謎についての明確な回答を示したものだと思います。最近、明らかにされたのは、肇輯の口絵「八犬士髻歳白地蔵之圖(はつけんしあげまきのときかくれあそびのづ)」が「唐子遊び」という画題を踏まえていると云う播本眞一氏による指摘で、根拠は、周囲の宝づくし模様の枠と、大が布袋として描かれている点でした。『寺子宝鑑字福伝』(享保五年)の見返がその典拠となっているそうです。「宝にかこまれて福神と唐子が遊ぶ図像は邪悪なものの存在しない空想の理想郷を表現しているだろう。……「白地蔵之図」は理想の世界をかいま見せて幼い犬士たちの未来を予祝し」たものとされています(播本眞一『南総里見八犬伝』を読む」、「近世文芸研究と評論」63号、二〇〇二年十一月、所収)。

ここで、みなさんにお考え頂きたいのは、第二輯の二番目の口絵の絵解きです。豪華な籠に乗っている犬塚信乃が柄杓を持ち、上に「一万度太麻」「いせのあまか　かつきあけつゝ　かたおもひ　あはびの玉の輿になのりそ」とありますから、お伊勢参りに関係するのでしょうか。左側に「遠き泉は中途の渇きを救わず、独木は大厦の傾くを指(ささえ)ること難し」とあり、赤子を懐にした額蔵が描かれていますが、この赤子は誰でしょう。二人間に描かれている蝦蟇と亀は蟇六と亀笹を示していると思うのですが、その回りの虫はなんでしょうか。この口絵などは確実に何等かの意味が秘匿されていると思いますので、是非お考え頂きたいと思います。

今日の話はここまでに致します。やはり、短い時間で『八犬伝』の魅力の全てについてお話しするのはとても困難です。どうか、ご自分で原文をお読み頂き、この血湧き肉躍る冒険小説に中で、豊穣なイメージの世界に足を踏み入れて頂きたいと思います。それでは、これで失礼致します。

http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0998.html

(・・いまや玄月翁は男の身でありながらの産みの苦しみというものに、この世もかくやというほどの七転八倒、この産む身の母なるものの、もぞもぞとした感覚は何かと尋ねる暇もなく、ふらふらと書庫を彷徨ったかと思うまもなく、一冊二冊、五冊十冊と江戸戯作の書棚から妖しい一群を取り出して、ついには机上に曲亭馬琴の壮観を並べ立てたのでありました・・)

(ば、馬琴ですか・・バキン・・?)　そうです。馬琴です。曲亭滝沢馬琴です。いま、馬琴を読む人はいますかねえ。ほとんどいないかもしれませんね。まあ雅文俗文を駆使した和漢混淆体の文章だけでも、後ずさりするかもしれないね。でも、とりあえずは現代文になったものを読めばいいんです。それでも『八犬伝』のおおまかな凄さはわかります。それから原文に入っていくといい。

(でも、今夜は、その、いよいよの・・)　なんといっても鴎外はね、「八犬伝は聖書のような本である」と言ったんです。こういうことは伊達では言えません。だってノヴァーリスになって、こう言うしかないわけですからね。『八犬伝』は聖書なんですよ。それにしても聖書をもちだされたとは、それも鴎外によってとは、馬琴もさぞかし冥利に尽きるでしょう。(ええ、でもセンセ・・)

『八犬伝』は読本(よみほん)ですね。だから読本を楽しむという読み方が必要です。稗史ですね。馬琴は100巻をこえる夥しい数の黄表紙や合巻も書いていますが、やっぱり読本が濃い。(はあ、こゆい‥)

それでもこれらは、いまでいうなら大衆文学で、直木賞の範疇になる。けれどもいまどきの大衆文学作品で、これは聖書だなんて言えるものはありますか。ちょっとないでしょう。どんなものがあるかと、いまふと思い浮かべてみましたが、まあ、たとえば大西巨人の『神聖喜劇』や車谷長吉の『赤目四十八滝心中未遂』、それからごく最近の阿部和重が山形の町を舞台にした『シンセミア』など、いい出来ではあるけれど、やはり聖書とはいいがたい。

ではなぜ、鴎外はそんな大衆文学のひとつの読本の『八犬伝』を聖書などと大仰に思ったのかということですね。そこを知りたいでしょう。(べ、べつに‥)　それはね、そこに「天」があるからですよ。(えっ、天がある？　でもセンセ‥)

馬琴に「天」を感じたのは、鴎外だけじゃない。露伴もまた同じことを感じています。露伴は「馬琴は日本文学史上の最高の地位を占めている」と言いましてね、そのうえで、「杉や檜が天を向いているように垂直的である」と形容してみせた。

杉や檜が天を向いているようになんて、露伴らしいですよ。これも伊達や酔狂じゃあ、言えません。何が垂直的かというと、同じ戯作でも京伝や三馬や一九は並列的で、ヨコなんですね。言葉や主題が社会とヨコにつながっていて泥(なず)んでいる。

それが馬琴はタテに切り込み、タテに引き上げる。天があって、空がある。虚空があって、星宿がある。物語がそこに向かって逆巻いて、こう、瀑布のごとくババッと落ちてくる。そういうところが垂直的なんだと露伴は見たんです。

これはね、『八犬伝』に天界にまつわる話がいろいろ出てくるというような意味ではない。そりゃあたしかに『八犬伝』は冒頭からして『水滸伝』に借りて、竜虎山の伏魔殿から洪大尉が百八り妖魔を走らせ、これを天まで水しぶきにしておいて、こう、ババッと舞い散らせたわけですから、天界は物語の半分を占めているようなものですよ。

それに冒頭で、例の里見義実が滔々と弁じたてているのは龍の分類学でしょう。最初から『八犬伝』は天から金襴緞子でいてかつ暗黒な、不思議な異様な物語が、こう、ババッと散ってるでしょう。(ええ、でも、そのババッとだけでは‥センセ、あと3冊で‥)

では、いったいどうして馬琴は「天」を介在させたかということですね。それがわからないとね。それには、ちょっと時代を見なくちゃいけません(いえ、そんなジカンは‥)。

あのね、江戸の文化は19世紀に入ると、文化・文政・天保という40年間でぴったり幕を閉じて、そこから先は御存知、黒船・安政の大獄・長州戦争ばっかりで、ことごとく幕末になるわけですね。この文化・文政・天保の40年間が、ちょうど馬琴の40代から没した82歳までにあたっています。そこにまず注目しておくことです。

で、この40年を思想や文芸や絵画で見ると、(そ、そこまで見なくても‥あと3冊が‥)　この時期ってのは、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』で明けて、式亭三馬の『浮世風呂』と『浮世床』、杉田玄白の『蘭学事始』、それから一茶の『おらが春』というふうに続くんですね。みんな、床屋とか洋学とか、外に向いてますね。ところが、このあと、山片蟠桃が『夢の代』を書き、平田篤胤が宣長の国学を受け、佐藤信淵が『混同秘策』や『天柱記』なんかを書いて、日本の本質を天にまつわらせていくんです。

それで、前夜にお話した会沢正志斎の『新論』の登場です。水戸の奥から「国体」が、ババッと出てくる。そうすると、南北は『東海道四谷怪談』を、頼山陽は『日本外史』を、それから北斎は『富嶽三十六景』を、何かをいったん重ねて折り返しておいて、それから天に開くんですね。(アイザワ正志斎と北斎が‥)

いや、ところが戯作のほうではね、これがあいかわらずの柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』だったり、為永春水の『春色梅児誉美』だったりするんだね。

そこで、大塩平八郎が大坂天満で爆死して、馬琴が『南総里見八犬伝』を仕上げていった。それからもうひと

つは、広重の『東海道五十三次』でしょうね。これは視点を上から横から斜めから‥‥。天保文化はこれで終わりです。(よ、よかった‥)

ただし『八犬伝』はね、初編は文化14年からの書きおこしで、それをさらに30年をかけているんです。しかも最後は眼疾失明のなか、幽暗さだかならぬ部屋の中、ひたすら口述をしておみちに書かせ、やっと大団円の完結にまで漕ぎつけた。いちいちおみちに漢字を教えながらね。それまでの『八犬伝』は11行の細字で書いていたんだけれど、それを6行とか5行にして大きい字にしてある。それでも書ききった。凄いことですよ。

それが天保12年です。だからこの40年間は、まさに『八犬伝』の時代だったともいえる。

こういうぐあいに、この時代は「天」をどのように問題にするかは時代のテーマのひとつでもあったということです。それが戯作文化のなかでは、「天」を使っていたのは馬琴だけだった。おそらく鴎外も露伴もそういうところに感心したのでしょう。さすがだね(どうぞ、センセ、先を‥)

それから、鴎外や露伴が馬琴を評価した理由には、もうひとつ別の事情もあったでしょう。それは『小説神髄』の坪内逍遥が、「小説の作法」のなかでクソミソに馬琴を貶めたんですね。そのため馬琴は明治読書界からしばらく姿を消していた。

逍遥は、八犬士のごときは仁義八行の化け物にて、とうてい人間とは言い難い。作者が背後で絲を索いているのはまことに興ざめであると言った。でも、これはどうみても逍遥のほうが狭隘すぎていて、これでは馬琴は浮かばれない。もっともクソミソに言われたのは馬琴だけでなく、三馬も一九も種彦も、江戸の戯作文学がまるごと粉砕されたのだけれど。

まあ、逍遥のリアリズムの提唱はそれはそれでひとつの開示であったんですが、鴎外や露伴はそういう“写実の流行”などにはかまけなかった人ですからね。そこで戯作を救ったんです。けれどもそこがこの二人の卓見になるんだけれど、他の戯作には見向きもせずに、馬琴ばかりを評価しましたね。こういうところが偉かった。

これは最近のことになるけれど、いま、実は、江戸戯作というのが研究者のあいだではちょっとしたブームになっていましてね、戯作ならなんでも結構、江戸の戯作者はすごかった、あの技巧はいまの日本になくなっているという音頭になって、これはこれでミソもクソも一緒くたの手放し絶賛ばかりしてるんですね。そこには、馬琴をすぱっと引き抜く選択眼がなくなっている。

だから今日の日本には、馬琴もいないが、鴎外・露伴もいないんですよ。寂しいね(さ、寂しがっておられては‥)

ま、こういうふうに、馬琴の熟成というものは文化文政天保にあるわけだけれど、じゃあ、その前がどういう文化だったかということです。(また、前に戻るぅッ‥)

そこには応挙、写楽、京伝、歌麿、そして宣長の『古事記伝』の完結という成果がずらりと揃っていたんです。だから馬琴の青年期は、これらの前世代をどのように見るかというところから始まるわけですね。そこで青年馬琴が目をつけたのが山東京伝なんですよ。馬琴は寛政2年(1790)に酒一樽をたずさえて、京伝の山東庵を訪れます。そして、京伝に習って戯作に入っていった。

あのね、ぼくは京伝をかなり高く買っているんです。この点については鴎外・露伴とはちょっとちがっていて、京伝の編集力こそ、その後のすべての戯作文化のありようと、メディア・エディトリアリティの何たるかを開いたのだと思っています。いずれそういうことも書きたいのだけど、いまそのサワリを言うと‥‥(そんなヨユーはないので‥)

あっ、そう？　じゃ話を戻して、その京伝を狙って馬琴が弟子入りしたというのは、だから馬琴も青年期にして、何か狙い澄ました目をもっていたということなんです。

ところが1年ほどたったところで、京伝の身に思いがけないことがおこる。『仕懸文庫』『娼妓絹舊』といった洒落本が町奉行の吟味にひっかかって、50日の手鎖りを受けたんです。

京伝を庇護していた版元の蔦屋重三郎も身上半減の闕所ですね。作品は遊里の「うがち」を試みた作品で、特段にあやしげなところもないのだが、寛政というのはそういうケチなことをやる擬似官僚社会の芽生えだった

んで、引っ掛かった。
これで京伝もやむなく自粛せざるをえなくなり、馬琴を蔦屋の耕書堂に預けることにするんです。馬琴という人は根は生真面目で几帳面だけど、事務能力があるというタイプじゃないから、その能力は手代になったからといって力が出てくるはずもないんだけれど、いまをときめく地本問屋の内幕を知っておくのもいいだろうってな調子で、住みこんだんです。
蔦屋もそういう馬琴には一目おいていたようで、手代ではありながら好きに書かせた。ここが蔦重一流のプロデューサー性が見えるところでね、いや、さすがだね。写楽も京伝もこうして売り出したんだものね。（ま、写楽のハナシまでは‥）　あっ、そう？　で、馬琴もその手に乗って、ついに戯作を書き始めた。これが曲亭馬琴一代の誕生なんだねえ。ああ、よかった。（いえ、そこで終えられましては‥）
とはいえ、当時の馬琴が書いているものは屈託のない黄表紙ですから、『御茶漬十二因縁』といったたぐいなんだよね。なんと、お茶漬けですよ、その、因縁話、わっはっは。（お笑いになっているバヤイかよ‥）　えっ、何か言った？　でも、ここにすでに、何かを書くたびに調べまくる馬琴の特徴が始まっている。お茶漬けも調べまくっている。
筆名の馬琴もこのときに決めてますね。『漢書』の「巴陵曲亭の湯に楽しむ」と、『十訓抄』にある小野篁の「才馬郷にあらずして、琴を弾くともあたはじ」です。
（で、八犬伝のほうは‥）　馬琴はよく該博な知の持ち主だといわれてきたでしょう。が、そうではない。知識はつねに作品の中にババッと消えていく。つまりは本物の作家なんです。作家だけの男です。きっかり作家だけ。入れた知識を貯めこんだり、弄んだりは絶対しなかったんだ。それをババッとひとつひとつの作品にほとんど全部使いきる。（またババッと、が‥）
あらかじめ言っておいたほうがいいから言っておくけどね、馬琴の作品は文字と言葉だけで成立していると思ってはいけないんです。

この時代、黄表紙がその先端を走ったメディアだったのですが、これは挿絵と文章を半分半分で同時に“読み見る”ものなんですよ。イラストレイテッド・ノヴェルであって、ヴィジュアル・ストーリーなのである。
だから作家、すなわち戯作者は、自分で挿絵のラフスケッチをしなければならなかったんだねえ。それを見て、絵師が仕上げていった。いまでは想像もつかないことでしょうが、筋も絵も、科白も背景も、みんな作家が考えた。ま、いまなら、物語型のマンガ家や劇画作家を想定すれば、なんとか見当がつくかもしれません。ああいうふうだった。とくに京伝など、絵を発想させても、描かせても、一級の腕をもっていた。（ふーん、そうだったんだ）
ということは、作家には最初から絵が見えていて、絵にならない文章など書くつもりもなかったんだねえ。しかし、ここからがもっと肝心なところになるんですが、江戸後期の戯作者は、それでいて文章だけでも読者を堪能させる技量をもっていた。そこがマンガ家とは一桁も二桁もちがっているところです。
いまのマンガ家には文章を書いておもしろい例はいくらかあるものの、たとえば、つげ義春や杉浦日向子ちゃんのようにね、でも、マンガになるべきストーリーを、京伝や馬琴のように小説として書ける才能があるかといったら、あまりお目にかかったことがない。
そもそもね、近松門左衛門の浄瑠璃や歌舞伎の物語にして、そうだったんです。近松は台本に初めて作者名を書き入れた。パイオニアではあったけれど、ふつうは浄瑠璃作家や歌舞伎作家は、役者にセリフを付ける役なのね。（なのね？）
このこと、よくよく腑に落としておいたほうがいいね。江戸の作家たちは、こうしてつねに場面や画面を視覚的に、また具体的に考えながら、物語を練り、科白を作り、同時に文章を仕上げていったのね。（たのね？）
これをマルチメディアライクだったと見てもいいけれど、それよりどうしても刮目してほしいのは、「近代よりも近世のほうが新しい！」ということなのよ。（セ、センセ‥）　わかるかしら、このこと。近代のほうが古代中世近世より、古臭いのね。（‥）
これがね、逍遥よりも露伴のほうが新しいという意味であり、近代絵画の先を浮世絵が走っていたという意味

であり、なぜ自由民権運動の闘士たちが争って『八犬伝』を読んでいたのかという理由なんだねえ。（ホッ・・）　ようするに江戸の作家たちのほうが、総合的なんですよ。

こうして馬琴は黄表紙を書きまくる。記録を見ると、毎年、8作から13作を書いていますね。よほど書きまくりたかったのだろうね、蔦重がむりやり薦める下駄屋のお百を渋々ながら貰ってますよ。

お百は年上で、かわいそうに眇目で、おまけに出戻りなんだ。でも、馬琴にとってはそんな器量や容貌よりも執筆態勢が安定することのほうが断固として重大だったらしい。こうして伊勢屋の入聟となると、馬琴はありとあらゆる題材に挑んでいったわけだ。靴屋のアンデルセンと下駄屋の曲亭馬琴。おもしろいね。（また・・）

ぼくは、寛政9年前後の版本をあらかた見たことがあるんです。それらはもはやムックともいうべきものですね。たとえば『四遍摺心学草紙』『楠木正成軍慮智輪』といった学習ものや戦記もの、『无筆節用似字尽』（むひつせつようにじづくし）や『北国巡礼唄方便』のような、唄や文字の見立て案内のような学習遊戯性に富んだもの、そういうものばかりでしたねえ。

馬琴自筆のラフスケッチ

『南総里見八犬伝』第九輯巻之三十六

表紙・裏表紙

そもそも黄表紙はね、擬人・擬態・擬音のオンパレードなんです。つまりは見立ての技法をどこまで進められるかが、黄表紙が当たるかどうかのバロメータだった。だから、みんなそれを試みた。

それで馬琴も『備前摺盆一代記』では、備前焼の美貌の摺鉢（すりばち）が江戸に出て摺粉木（すりこぎ）を夫に迎えるという話にしてますよ。摺鉢と摺粉木の夫婦だよ、はっはっは。（ま、また・・）

おまけに主家が分散したため摺鉢は屑屋に売られ、夫婦別れ別れになりながらも、摺鉢は植木鉢となり、犬の飯茶碗となりながら、めでたく夫の摺粉木と再会するという話、こんなんだからねえ。（そろそろ八犬伝を・・）

それが『足手書草紙画賦』では、人間の手と足が互いに勝手な行動をして歪みあいながら縺れて困るという話なんですよ。わー、はっはは。それから『敵討蚤取眼』ではね、蚤取眼五郎が蚤を相手に敵討ちをするという話などを連発して、（あのー・・）　もはやどんな見立ての題材にも困らないというところまで、ひたすら突進していったんですね。

しかし、これではどうも粋じゃない。洒落てもいない。けれども馬琴の性格からして、お百が女房であることからして、（そ、それはカンケーないかも・・）　いまさら抜けたセンスをものにするのも無理がある。いささかマンネリになったかなというころ、師匠の京伝が読本に転じて『忠臣水滸伝』で大当たりをとったんです。

では、ここからちょっとマジメな話になりますが（えっ、ではここまでは・・）、第447夜にも書いておいたことだけど、日本の文学史に変更をもたらしたのは水滸伝ブームなんですね。

最初は建部綾足が『本朝水滸伝』で先鞭をつけるんです。そうすると、天元の『日本水滸伝』、椿園の『女水滸伝』、振鷺亭の『いろは酔故伝』などが、次々、目白押しにあらわれた。これを中国ブームとかシノワズリーと勘違いしてもらっては困ります。そうではなくて、その逆の、日本ブームなんです。日本の史実をどのように描くかを水滸伝に借りたんです。

ここには元をただせば、仁斎と徂徠が中国儒学を古文辞や古学に戻した動向が発していたことに関係がある。（おっ、いよいよドクダンジョー・・）

とくに徂徠は、朱子学は現実社会も内面の心理も包括していないと見て、古代の聖人が陶冶した精神への回帰を訴えたわけだが、これがまず、聖人の精神を徳川社会の義理人情におきかえるという方向をもたらしていくんです。わかりやすくいえば、不遇の自己の身をこらえにこらえて、真の聖人的格調に達していくという、そういう物語性に転化していった。

これは文学史的にいえば、いわば擬古主義を奨励したというかっこうになります。古代中世のヒーローとか伝説の傑物とか、そういうものをとりあげて、それを徂徠学ふうにまとめるんですね。そこで浄瑠璃や歌舞伎が

この考え方をいちはやく移植した。

そこへ、岡島冠山や岡白駒による中国白話小説や中国伝奇小説の翻訳がどどっと流れこんできたんです。このこと自体はたしかに中国ブームであるのだが、それだけじゃなかった。これで、新たに二つのことがおこったんですね。

ひとつは、白話に刺激されて日本の物語にもふだんの会話が溢れてきたことです。これが結局は黄表紙に流れ、京伝の「うがち」にまで発展していった。これはわかりますね。(え、ええ‥)　もうひとつは、日本にひそむ伝奇伝承を求めて新たな文学世界を作りあげるということで、これが代表的には上田秋成の傑作『雨月物語』になっていく。ここもわかるよね。第447夜にも書いたことです。

しかし、この動きはそこでとどまらなかったんです。ここに、さらに二つのエンジンが火を吹いた。

それで最も劇的なことは、第996夜に紹介したばかりですが、李卓吾の陽明学が入ってきて、『水滸伝』の読み方ががらっと変わったことなんですよ。(おおっ、またまた出ました李卓吾、陽明学、オーヨーメー‥連日連夜のごかつやく‥)

それまでの『水滸伝』は、幕府の執拗な統制のせいもあって、反権力的な読み方はつねに割愛されてきたか、もしくは抑制されていたわけですね。それががらりと逆になった。権力に逆らう者にも「義」があって、また「仁」があるじゃないかということになってきた。しかも、その「義」や「仁」は中国から借りなくたって、日本人の歴史や伝説の中にもある、いや、それこそ本物の儒なんじゃないかというふうになっていったんです。

で、これを象徴させたのが綾足の『本朝水滸伝』であり、また、その後の京伝の『忠臣水滸伝』だった。

しかし、これだけではなかったんです。さらにそこへ加わってきたのが国学です。

これも第992夜で説明しておいたばかりだが、宣長は、源氏・古今・万葉の奥にあった出来事に光をあてただけでなく、神話的現象や神話的表現そのものに真実があることを知らしめたわけだよね。つまりは、まこと。この国学の成果が日本的陽明学の波及と並んで、戯作世界の最高段階にあたるといっていい読本に、どどっと流れこんできたわけなのである。(こんどはドドッと‥)

勉強熱心で、どんな素材にも怖じけづかない馬琴が、このような推移と動向を見逃すはずはない。馬琴もいよいよ読本にとりかかるわけです。

あらかじめ言っておくが(アラカジメはもう2度目‥)、いうまでもなく馬琴の読本の才能は『八犬伝』ばかりに発揮されたのでありません。『椿説弓張月』も『近世説美少年録』も抜群です。これらは‥‥(いえ、八犬伝にまっしぐらにお進みを‥)

あっ、そう?　ではそれらの作品にはいまはふれないけれど、ぼくが『八犬伝』を読んだまま10年くらいたって『椿説弓張月』と『近世説美少年録』をたてつづけに読んだときは、これは『八犬伝』にまして方法の意図がよく見えて、もしもぼくが物語を書くときでもあったのなら、こちらにこそ肖(あやか)って、アヤの一族の物語でも書いてみようかと思ったほどだったんですね。(ま、それはそれでゴジツということに‥)

それでちょっと『八犬伝』から目がそれていたんだけれど、そのあと、高田衛さんの『八犬伝の世界』を読んで、愕然とした。目からウロコが落ちました。絶版らしいけれど、中公新書ですね。1980年でした。

それを読んで、それまでぼくが前田愛さんや松田修さんや『国文学と鑑賞』なんかで読んでいた読み方など、まだほんの序の口であることを思い知らされた。これはびっくりしましたね。

(センセーでも、そーゆーことが‥)　むろんありますよ。しょっちゅうです。だいたい読書なんて一回では何もわかりません。それも時間をおかなくちゃ、何も見えてはこない。読書ってアスリートとスポーツゲームの関係のようなもの、いつも100メートルで10秒を切れるわけではないし、いつもホームランを打てるわけじゃない。やっぱり何度も何度も同じ練習をし、何度も同じピッチャーや相手に挑むしかないんです。(し、しまった‥)

馬琴のばあいはとくに大河小説ですから、『神曲』や『大菩薩峠』と同じで、いつも読んでいるわけにもいかない。

それに長編映画の記憶がそうであるように、いったん入った部分的印象がなかなか離れないんだよね。そういうときは高田さんのような外からの切り口が、絶対に必要です。これは読書の秘訣のひとつ。

ま、「千夜千冊」もそういうふうになればいいと思って、こうしてなんとか綴ってきたんです。それもいまや、どんじりの、あと3冊‥。えっ、あと3冊？　（だから‥）　それじゃ、こんなことしていられないじゃないか。（ええ、だから‥）

それにしても、ねえ、見立ての技法をくまなく渉猟してきた馬琴が、いよいよどのように読本に転じていったかという“process & reality”には、なかなか用意周到で、決して焦らぬ水準の向上というものがあるんです。これまた見逃せません。

庚申山の妖猫

最初は、なおまだ黄表紙めいていましてね、狐が謝恩のために仇討ちを援助するとか、霊蛇が黄金の太刀に変化（へんげ）して武士の所望を成就させるとか、鷹が婚姻の仲立ちをするというような、はっはっは、やはり得意の擬人法を採っていたんです。

それがついでは、三勝半七やお夏清十郎やお染久松のような浄瑠璃歌舞伎の素材を拵（こしら）えて、人情や義理の理想化をはかるようになると、その次の段階に入っていよいよ日本の史実に食い入って、義仲や俊寛を扱っていくんですね。（センセ、懲りてない‥）

ぼくは、きっとそこで何かの秘密を達観したのだろうと思うんですが、ともかくここで一挙に『椿説弓張月』で鎮西太郎源為朝を物語の中心におくと、あとは一気呵成の、いわば日本精神主義なんだねえ。その寄せ方は凄いねえ。もはやどんな脇目もしないし、寄り道もしない。それまでさんざん脇目をして情報をインアウトしてきたから、それで一心不乱もできたんでしょう。

麻生磯次さんの馬琴論では、そこには宣長と水戸学こそがかかわっていたと言いますね。（えっ、ついに水戸学が‥）　うん、そのへんはいっぱい話したいところなんだけれど、でもそろそろ時間がないね。じゃ、ここからは自分で書くよ。（ついにジタイを理解‥センセ、がんばって‥あたしがついている‥）

それでは、お待ちかね、『南総里見八犬伝』である。この大河小説は、やはり恐ろしい。鴎外が聖書だと言っただけのものがある。

時は嘉吉。あの、下克上激しい「嘉吉の変」の嘉吉だ。１４４０年代にあたる。この設定がよかった。

関東公方足利持氏父子は将軍足利義教と執権上杉憲実に責められ、報国寺で自殺した。持氏の遺児春王・安王を引き取った下総の結城氏朝は義兵をあげるが2年間の奮戦むなしく、嘉吉元年（1441）に落城する。いわゆる結城合戦である。

このとき結城の陣営に加わって討死した里見季基の嫡子義実（よしざね）は、父の命により敵陣を斬り抜け、郎党二人とともに相模に逃れ、三浦から安房に渡る。このとき里見義実は白竜が天に昇り、南をめざして飛んでいくのを見た。この白竜の昇天が、すでに読者の胸騒ぎをつかむ。さらに最後の最後までの暗示になっていく。

安房では滝田城にかまえる領主の神余光弘が権勢を誇っていたのだが、玉梓（たまあずさ）の容色にすっかり溺れていた。家臣の山下定包（さだかね）はその玉梓と密通して、光弘を討ってその所領を奪う。平館（ひらだて）領主の麻呂信時はこれを憎んで、館山の安西景連をたずねて定包を倒す計画を練る。そこへ義実が景連をたよってやってきた。（センセ、ちょっと‥）

義実を内心恐れていた景連は、安房にはいない鯉を3日以内にもってくるという難題をふっかける。鯉をさがしあぐねてさまよう義実は、白箸川のほとりで神余家の残党と会う。これが金碗（かなまり）八郎である。おそらくは金工（かなだくみ）系の伝承を引きずっている。八郎は義実を応援に頼み、ともに滝田城を襲い、定包を討つ。

義実は玉梓を赦そうとするのだが、金碗は妖婦玉梓を許さない。やむなく斬首すると、玉梓は「殺さば殺せ、そのかわり里見・金碗代々を畜生道に導き、煩悩の犬にしてくれん」と言って息絶えた。（センセ、ちょっとセンセ

ー、詳しすぎます‥)

7月7日の夜、里見義実は新たなリーダーとなって、この合戦に功のあった者に褒賞を与えようとすると、金碗八郎は二君に仕えることを潔しとせず、切腹してしまう。いまはの際に愛児の大輔と出会い、何事かを託す。そのとき、義実は玉梓の幻がすうっと大輔によりそって飛ぶのを見た。

旧領主の麻呂家を滅ぼし滝田の城主となった義実は、万里谷(まりや)入道静蓮の娘の五十子(いさらこ)を娶る。やがて一女をもうけて、伏姫(ふせひめ)と名付けた。けれども伏姫は3歳になっても言葉が喋れない。アジスキタカヒコネなのである。

五十子は州碕明神で行者の岩屋に祈願した。ある日、役の行者の化身とおぼしい老翁があらわれ、「仁義礼智忠信孝悌」の八文字を彫った水晶の数珠を五十子に与えた。伏姫はその法力によって快癒する。数珠には八つの大珠と百の小珠が連なっている。よく見れば八つの大珠からは、言霊、霊音さえ聞こえてくるようである。(センセ、センセ‥)

そのころ富山近くの農家の子犬が、毎夜、村に降りてくる狸に育てられている奇妙な噂を聞いた義実は、その犬を場内に召して、八房(はちふさ)と名付けてかわいがることにした。康正2年(1456)の秋、安西景連から伏姫を養女に迎えたいという申し入れがあった。

義実がこれを断った翌年、里見領地は激しい凶作に見舞われて、塗炭の苦境に陥って‥‥(センセ、このへんで‥)

『仮名読八犬伝』第十一編上下冊表紙

いやいや、あやうく梗概を語り始めそうになっていた。止めてくれてありがとう。これを始めたら、もうどうにも止まらない。終わらない。

それにしても『八犬伝』は筋書きそのものが絶妙におもしろいので、それを知るのが一番なのだが、それでは馬琴の本来の構想や狙いはわからない。そこで、ぼくとしてはこういうことをするのはめずらしいのだが、あえてレッテルやラベルを貼りまくっておくことにする。(ホッ‥) 『八犬伝』というのは、そういういくつもの見え方のする、まさしく化け物のような物語なのである。ラベルとはいえ、これはまあ、格別最上級の大吟醸酒『八犬伝』という瓶に貼られたラベルだとおもわれたい。

『八犬伝』に貼られた第1ラベルは、世界に冠たる壮大きわまりない「動物文学」ということである。

犬が八犬士になるだけではなく、犬の八房をはじめ、殺人の犬、白い龍、化身をもよおす猫、童子を乗せる牛、人を殺す牛、犬を育てた狸、巨大な鯉、いろいろ出てくる。これはイソップやオーウエルの比ではない。

僅かに『ジャグル大帝』の手塚治虫が匹敵するとも思えるが、人に「分」があるなら動物に「分」があっていいと考えていた馬琴の思想が、さて手塚にあったかどうかはわからない。手塚には儒学や国学は薄かったのではないか。

第2ラベルは、「聖女の神話」と書いてある。この聖女というのはむろん中心には伏姫がいる。

さきほど梗概を書きそうになったが、あのあと、美しく成長した伏姫は意外な宿命を背負うことになる。義実には愛犬八房がいて、その八房に、あるとき義実が安西景連に包囲されて落城寸前の窮地に追いやられたとき、「もし景連の首を取って来たなら、伏姫をおまえにやるのだが」と呟いた。それを聞いていた八房がはたして敵将の首を咥えて帰ってきた。このため、伏姫は八房に伴われて富山に上っていったのである。

伏姫と八房

この伏姫がどのような聖女の宿命を負っていたかは、その直後の物語の展開でわかる。伏姫は八伏とともに山中洞窟で法華経を読むうちに、月経が止まってしまうのだ。これははたして八房と交わったかと思わせるのだが、その暗示をふくめて牛に乗った笛吹童子が謎かけをする。そこへ心配のあまり駆けつけた義実の前で、姫を追っていた大輔が誤って鉄砲を姫に命中させる。(センセ、また‥)

なお疑念が渦巻くなか、伏姫は身の潔白をあかすため、みずから守り刀で腹を引き裂くと、妖しいかな、腹

中から白気が立ちのぼり、襟元にかけていた数珠の八字を包むかとみるまに、八個の親玉は光を発して八方に散り、そこで伏姫は「私が急ぐのは西方浄土です」と言ったまま、悶絶する。大輔はその場で出家して、丶大法師(ちゅだいほうし)と名を変えて行脚の旅に出る。「丶大」とは「犬」の字を分けたものだった――。

この伏姫にまつわった「負」のすべてが、このあとの八犬士の離合集散の物語のすべてになっていく。まさに伏姫は聖女のスティグマをもった女神か、天地を昇降する太母(グレートマザー)か、もしくは巫女なのである。

それゆえ第3ラベルには、この物語が「異類神婚伝説の再生」であるというふうに、刻印される。それは人獣混交のアニミズムであって、その忌まわしさゆえの浄化と昇華を歌った物語なのである。そのルーツは槃狐(はんこ)説話にさかのぼる。

しかし一方、伏姫が八珠を孕んだということは、第4ラベルにおいては、『八犬伝』は「処女懐胎」をテーマにしていたとも言えるのかもしれない。

実際にも、このテーマを強調したのが北村透谷だった。透谷は『處女の純潔を論ず』において、伏姫の割腹懐胎の場面をとりあげ、伏姫が処女の純潔を守ったことを、絶賛した。キリスト者の透谷にとっては、明治の女たちが純潔にあまりに鈍感であることが気にくわなかったのだ。

もしも馬琴が、この「処女懐胎」という絶対矛盾の自己同一めいた出来事を意図的に変形していたとすれば、これはただちに男の愛を拒否する女性の無答責性を底辺に響かせる、たとえば「かぐやひめ」や「うないをとめ」(菟原処女)や「ままのてこな」(真間の手児奈)にただちにつながって、そこにはいわば「とこをとめ」(常処女)という観念の樹立も想定されていたということになる。

しかしながらそう見てくると、ここにはトランスジェンダーの母型もがあらわれているともいえる。女として育てられた犬塚信乃や、女田楽の旦開野(あきけの)という美少女が、実は15歳の美少年犬坂毛野だったという話も出てくる。馬琴自身はごくごく禁欲的な人物であったけれど、物語にはこうしたトランスジェンダーや妖婦や毒婦やきわどい場面は、ふんだんに盛り込まれた。

さて、第5ラベルには、「反文明小説」と銘打ってある。それでいて第6ラベルには「稀代のユートピア小説」と書いてある。むろんこれらは表裏一体で、現実社会の文明性を蹴散らそうとするからこそ、ユートピアも想定される。

この物語は、やはり南総王国物語であって、里見無可有郷伝説であるような、そういう仮想帝国の樹立に向かっている。多様なトピックを連ねて、一連のユートピックに繋いでいこうとしている物語構造なのだ。そのトピックは中盤からは八人の別々の物語となり、それらが途中から縒り合わさり、組み合い、重ね合って大団円に流れ込む。

それゆえ、ここには一個の独立した「島」あるいは「王島」が出現しているといってよい。房総半島は島ではないけれど、冒頭、義実らがそこへ海側から辿り着いたということが、そこを叙述上も「島」っぽく見せていた。ぼくには、ふとポオの『アーサー・ゴードン・ピムの冒険』を思わせた。

しかし、この「王島」にいたる過程のすべては反文明的なのだ。それはガルシア・マルケスの『百年の孤独』(765夜)に似て、滔々たる時の流れを吸い込む河口であって、どんな社会の現実からも、その現実の断片を引用はするけれども、それとは地続きにはならないような、そのような文明中心を拒否する「場所」でもあったのである。

一方、第7に、『八犬伝』はなんといっても「遊侠の活劇」である。説明するまでもなく、ここには侠客が踊り、侠気が漲っている。八犬士すべてが「侠」なのだ。

「仁」が犬江親兵衛である。「義」が犬川荘助、「礼」が犬村大角、「智」が美少女然たる犬坂毛野で、「忠」犬山道節、「信」が犬飼現八、「孝」が女装の美男子犬塚信乃であり、「悌」が犬田小文吾に配当されている。

話は犬塚信乃の出世譚から始まっていて、その信乃が結城城崩落のときに持ち出された宝刀村雨丸を守ろうとして動いているうちに、「義」の玉をもつ犬川荘助に出会うというスタートになっている。

八犬士たちの暗合は、ひとつには水晶珠玉に浮かび上がる文字であるけれど、もうひとつは各自の体についた牡丹の痣である。これは八房の八カ所の斑の毛のかたちが牡丹に似ているところに出所した。

しかし、馬琴はなかなか八人を出会わせない。あいだに信乃と浜路の恋愛を挟み、その浜路に横恋慕する網干左母二郎が村雨丸をすりかえるあたりから、俄然に物語をゆさぶって、意外にも浜路のほうが犬山道節の「忠」を発見するというように‥‥(センセ、だめです。八犬士の話は長すぎます。飛ばしましょう‥)

ううっ、これは困ったことになったけれど、ともかく、この「侠」は、中国に範を求めた「侠」でもありながら、実はさきほど「馬琴の時代」と言ってみた文化・文政・天保についに登場してきた日本の侠客たちの面影をいかしたものなのである。

それだけではない。麻生磯次の説として紹介しておいたのだが、馬琴はやはり水戸学と宣長学に傾倒していて、その水戸イデオロギーの飛沫を「侠」に交ぜていた。(はい、そこまで、タイムアップです‥‥)

では、『八犬伝』らしく第8のラベルで打ち止めとすることにするけれど、この物語はその因果のすべての転出構造にわたって、「ウツとウツツの物語」だったのである。(えっ、そうだったんだ‥)

そもそも南総里見の空間がウツだった。伏姫懐妊の洞窟もウツである。また、八犬士のなかでは親分的な役割をふりあてられている犬江親兵衛にして、生まれてから一度も開いたことがない左手の拳をひらくと、そこに「仁」が飛び出したのである。この左手もウツそのものである。

そのウツからありとあらゆる物語が派生するのだが、それぞれがいったんはウツホやウツロを体験させられて、窮地に陥り、そのうえで、まるでその「負号」が何かに写し取られ、映し解かれていくように、次々に転写する。

馬琴はこのウツロヒを徹底して描く。たとえば犬坂信乃・犬飼現八・犬田小文吾が犬川荘助を庚申塚の刑場から救出する場面では、庚申塚をウツなる結界として見立てて、そこに歌舞伎の「だんまり」といもいうべき暗転写しを見せて、いったん結集できるかとおもえる犬士たちをまた散らせたりしてみせる。

まるで、結んで開いて、また産霊が解けて、なのである。また、その庚申塚のプロットの直後の、有名な荒芽山の場面では、戸田川の水底をウツにして、そこで死んだと思われていた靖平に二人の双生児をあてがって、これを写し取り、それをよくぞ戻ったと喜ぶ音音(おとね)の前で、これは幽魂にすぎないと明かして事態をうつろわせ、それでは話が幽艶哀切すぎるとおもわせたところへ、これまたウツの象徴のような“包み”の取り違えという事件を巧みにもちこんで、いっさいがっさいを、ふたたび彼方に迷わせてしまうのだ。

しかしなんといっても、伏姫の胎内から飛散した珠玉が、命と心と体を得た八犬士としてついに揃って、大立ち回り、万事を収めて施餓鬼をしていると、そこに甕襲(みかそ)の玉がいよいよ凜と鳴るというのが、ウツがウツツとなって、またウツに帰趨するという象徴的因果律なのである。これでなんとか八犬士も揃ったことになる。

さあ、これであと2夜を残すのみ――。

(えっ、それでオワリ?) そうです。これですべてが終わって、八犬士はやっと安心(あんじん)を取り戻す。よかった、よかっただよ。信乃は浜路と結ばれるし、大角は雛木姫と結ばれるしね。万事、めでたし。(エーッ、気になる‥)

気になるたって、それが『八犬伝』だからね。詳しいことは読んでみて考えること。現代語訳なら2日か3日もぶっとうせば、読めるでしょう。ちょっとメモなどとるといい。

(エーッ、その、甕襲の玉が気になって‥) そりゃ、そうだろう。これは『八犬伝』最後の謎だろうからね。でも、その話をしたら、あと倍ほどかかります。だって、もう時間切れなんでしょう。自分で考えなさい。たまには「千夜千冊」も謎をのこしたいもんね。「甕襲」を残すなんてのは、いいだろう?(み、みかそ‥もっと聞きたい)

では、言い残したことで、もうひとつだけ。それはね、読本では挿絵がとても重要だということです。『八犬伝』では柳川重信が挿絵を担当しているんだけれど、やっぱりうまい。やっぱりというのは、この人は葛飾北斎の弟子で、北斎の長女のお美弥の聟になっている。だから、うまい。北斎はすでに『椿説弓張月』の装丁挿絵を描いて、抜群の工夫の数々を披露したんです。口絵図版を見開きに拡張し、薄墨重ね摺りを発案してそこに艶墨を入れるとかね。

でも、何が重要かといって、やはり絵柄です。とくに『八犬伝』ではすべてが絵解きになっていて、謎をヴィジュアルに暗示しています。さきほど紹介した高田衛さんの『八犬伝の世界』は、口絵の一枚の謎解きから始まっていて、

実に示唆に富んでました。
でも、寂しいのは、こういうイラストレーションを描く人がいないということと、それを作家と組んで組み立てるという文化がなくなってしまったことですね。
それからいい忘れたけれど、『八犬伝』全巻のなかで一番大事な謎を握っているのは「丶大法師」だよ。（えっ、ちゅ、ちゅだい・・センセ、それじゃあんまり・・）